
会いに行こう、果てしない世界にいる君の元まで

入間と濡れたおこきと小山内さんと柿原凜と沈黙の臓器の臓物君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

会いに行こう、果てしない世界にいる君の元まで

【Nコード】

N4767K

【作者名】

人間と濡れたおきと小山内さんと柿原凜と沈黙の臓器の臓物君

【あらすじ】

少年はある日、一通の手紙を海で見つけた。
差出人も何も分からないその手紙に込められた思いを元に、少年の旅は始まる。

一方、差出人も「恋人探し」と銘打って旅に出る。
この二人の手探り状態の旅の物語で真っ白い恋愛ファンタジー。
斉藤と龍皇神凜の合作小説。

プロローグ

生きている間に私は燃えるような恋がしたい。

そう思ったのは小学五年の時、男子に何振り構わず話しかけていたのを覚えている。

手紙を書いて告白したのは中学一年の時、その時の返事はイエス。しかし付き合って一ヶ月も持たずに破局した。

それでも恋をしたいと思っていた。

どうしてか？ 良く分からない。気付いたら良い男を捜すような奴になっていた。

そして私は高校三年になってからの春、海辺で浜探しをしていた。右手に軍手を二重にしてそこの砂を引っ掻き、ビーダマとかいんな物を探した。と言っても、本当は鼠の骨や、巻貝やアサリの貝殻しかなかった。

はあ、何か無いかなと鬱になる。

その時見つけたのは一つのボトルだった。

ワインのビンみたいだけど、それでもなく、太い。

私はそれを手に取る。ラベルは風に晒されていたのか、何が書いてあるのか分からない位にボロボロだった。

しばらくそのボトルとにらめっこすると、後ろから声がかかった。

「？」

少しだけ後ろを振り向くと、一人の少年がいた。私より年下の様

だ。

「何してるんですか？」

「んー……事件搜索ですよ」

へえー、と順応する少年。おいおい、君そんな事してたらキャッチセールスに捕まっちゃいますよ？

そんな事思っている少年は私の隣に座ってきた。
突然の事に少しだけどきりとした。

「何か良い物ありました？」

「んー、今のところゼロかな？」

しかも今日が初めてだしね。と胸中の中で思ったのは内緒。
少年……彼はへえ……と勿論順応した。

「……ごめんね？ 今日が初めてなんだ」

「あ、そうなんです。良い物が取れたら良いですね」

……この人もの凄い順応性っていうか柔らかいよねえと思った。
少しだけ狼狽していると、彼は素手で地面を掘り始めていた。
私はそれを見て、軍手を一枚渡した。

「？」

「これ、貸してあげます」

「あ、ありがとう」

彼は左手にはめ、右手で掘る。

軍手つけた意味無いよねと思いつながら私は彼の隣で掘るのを再開した。

「……あ」

気が付けば日が暮れ始めていた。空が紅くなりはじめで、太陽が地平線へと飲み込まれている所だった。

隣でそんな時間の変化を気にしないで地面掘りをする彼。

「あ、そのもう時間ですよ！」

「あれ？ ああ、もうこんな時間ですか……」

勿論彼は順応性が高かった。そんな変な彼を見ると、彼は私を見つめる。

三秒ほどすると、私の頬は茹でた蛸みたいに赤くし、視線を逸らした。

その逸らした視線の先に入った物があった。

一枚の紙。

「あの、これは？」

彼は私が指差すものを見て、手に取る。

「ああ、これね」

と言って彼は私にそれを見せた。

『ホスピス入居願書』

私はそれを一通り見た後彼を見た。

「僕は、癌なんですよ」

「……」

しかも末期だから、ステージ四だっけ？ と曖昧な答えをする。

「ここに入る前に何か良いこと無いかなあって思っていてね、そしてたら君がいたんだ」

「そうなんですか」

「うん。最初は文字でも書いているかなって思ったんだけど、したら君は浜探しをしているじゃない」

「でも、初めてですよ」

「僕ですよ」

お互いにそんな事を言っていると笑えて来た。
彼も笑った。本当に綺麗な笑顔だと思った。

「私、多分貴方の事が好きです」

「そうですか？ 僕も君と一緒にいると楽しいですよ」

愛の告白には聞こえなかったらしい。私は少しだけ残念な気持ちになって、そうですかと優しく笑った。

彼が去って行くところを私は見送った。

彼は小さく手を振る。私もそれに応じて大きく手を振り回した。

そして角で彼の姿は消えた。

私はもう一度海を見た。

太陽が半分だけ埋まっていた。私の右手にあるのはボトルだった。鞆を持ってきて、紙とボールペンを引っ張り出す。書き殴る様に、書いた後、ボトルに詰めて、思いっきり太陽に向かって投げた。

太陽に当たっちゃえ！　と思って投げたけど途中で速度が落ちて虚しく海に落ちた。

人の恋なんてこんなもんだ。と自論を立てたりした。

「はあ……恋がしたい」

大声で叫びたかったが、少しだけ気が引けた。

だから私は旅に出た。

手元にある、預金通帳とキャッシュカード。預金通帳の中身は四百万ほど。だけどこれだけで十分かなって思った。

そして、一歩。自分探しならぬ『恋人探し』の旅に出た。

第一話：ボトルレターといつかの彼女

病室から飛び降りても死ねなかった。

それもそうだ。二階から飛び降りたところで、せいぜい骨折するくらいだろう。

良かったのか悪かったのか、僕は肩と膝の打撲だけですんでしまった。

ふとこの地面に飛びこむ前までいた病室に目をやる。

家族や先生とも今日でお別れか。

お化け屋敷のように見える病院をゆっくりと後にする。

夜明けはもう近かった。

冷たい道路を裸足で歩く。

意外と気持ちが良いものだ。

しっとりとした表面をよろけるように歩く。

この場を通りかかった人はきつと僕の事をお化けだと勘違いするだろう。

海岸にそって伸びているこの道路は、いったいどこまで続いているのだろうか。

果てしない事このうえなしだ。

高校を卒業する今年の夏、僕は癌を発症した。

医者は本当の事は言ってくれなかった。

いつもいつも「もうすぐ直るから」ばかり。

遂には唯一信頼していた親までも同じことを言うようになった。だから僕は病院を出たのだ。

高校を卒業する前に、信頼できない大人たちから卒業したのだ。もう頼れるものなど何もない。

やがて海が見えてきた。

海はどこまでもやさしいものだ。
包み込むようにむかえてくれる。

あの忌まわしい病室から見える海を眺める事が毎日の生きが이었다。
った。

薄暗い空に翻弄されるように、海も静かだ。

海に着いた。

ここにくるのはいつぶりだろうか。

確か最後にここに来たのは入院する少し前だったような気がする。

——ここで僕は、女性を見た。

ある日の昼下がりのことだった。

細い手足の綺麗な女性。

ワインボトルをずっと眺めていた。

僕はその姿を不思議に思い、勇気を出して声をかけた。

「んー……事件搜索ですよ」

そう彼女は答えた。

事件という事は、凶器か何かを探しているのだろう。

「何か良い物ありました？」

「んー、今のところゼロかな？」

もしかして海に流されてしまったのではないだろうか。

そうならば見つけるのは困難だ。

砂がかぶさって、ほとんど見当はつかないはずだ。

「……ごめんね？ 今日が初めてなんだ」

「あ、そうなんですか。良い物が取れたら良いですね」

そう言っ僕は細かい砂を素手で掘った。

僕も協力したかった。

細かい粒子が気持ちいい。

そんな僕を見てか、彼女は軍手を分けてくれた。

この細かい砂の気持ちよさを味わいたかったから、あえてつけな

かった。

でも彼女の優しさがもつたないから、掘っていない方の手につけた。

それから半日くらい掘り続けたが、何も出てくるものは無かった。

「あ、そのもう時間ですよ！」

「あれ？ ああ、もうこんな時間ですか……」

ポケットの中に入っていた懐中時計を見ると、もう夕方になっていた。

腰を上げると、ちょうど彼女の顔があった。

下手に目をそらす事ができず、しばらくはお互いにみつめあうことになった。

彼女の顔は夕日に照らされて赤くなっていた。

そんな彼女から目を逸らしてくれたおかげで、僕はやっと緊張がほぐれたような気がした。

「あの、これは？」

彼女が何かを拾って僕に見せてきた。

それは、僕の書類だった。浜風に飛ばされていたのだろうか。

濡れていたら大惨事だった。

感謝の気持ちでいっぱいになった。

「ああ、これね」

彼女に見せながら説明する。

「僕は、癌なんですよ。しかも末期だから、ステージ四だっけ？」

あまりに重い話だからか、彼女は黙ったままだ。

「ここに入る前に何か良いこと無いかなあって思っていてね、そしてたら君がいたんだ」

「そうなんですか」

「うん。最初は文字でも書いているかなって思ったんだけど、そしてたら君は浜探しをしているじゃない」

「でも、初めてですよ」

「僕ですよ」

そう言って笑った。

彼女も僕につられて笑った。

なんだかその瞬間はひどく幸せだったと思う。

「私、多分貴方の事が好きです」

その言葉に僕は驚いた。

まさか、初対面でそれはないだろうと。

多分、彼女は僕の事ではなく、僕とのこの瞬間が好きなのだろう。

「そうですか？　僕も君と一緒にいると楽しいですよ」

僕がそう言くと、彼女は戸惑ったような表情をした。

それがなんだか申し訳なく思い、僕はそこを離れた。

一応小さく手を振ると、彼女はその何倍も大きく振り返してくれた。

この瞬間が、もつと続けばいいのに。

素直にそう思えた――。

あの時のような希望は今とはひとかけらも持っていない。

癌の治療で精神は崩壊しそうになるし、頼れる人もいない。

海だけが、こんな僕をやさしく抱いてくれるのだ。

波のリズムは心を穏やかにさせ、磯の匂いは懐かしささえも感じる。

そんな波が行ったり来たりしているところにそれはあった。

綺麗なワインボトル。

あの日を思い起こすような、ボロボロラベルのワインボトル。

惹かれるようにそこまで走り、ただ真つすぐそれをみつめた。

すると中に紙が入っている事に気付いた。

それが出ないようにコルクでとめてある。

僕はまずコルクを力いっぱい抜き、中に入っている紙を取り出した。

勉強に使うようなルーズリーフに、黒いボールペンで書きなぐるように書かれた字。

そこにはたった一言、『私の恋人になってください』とある。字体からこの手紙の主は女の子だろうか。

不意にあの日の彼女を思い出した。

長い手足の綺麗な彼女。

もしかしたら、あの後彼女が書いたものだろうか。

それならば話は早い。

答えは『はい』、だ。

彼女なら僕の事もなんとなく分かってくれるような気がした。

でも、この彼女はどこの誰だろうか。

宛先や名前さえも書いていない。

僕は微かに輝いたかのように思えた希望のかけらを心の奥に隠した。

……無理だ。もう一生会えないだろう。

諦めかけたその瞬間、空の色が変わった。

朝焼けの太陽があの日夕焼けに重なった。

キラキラ光る海も、僕を後押しするかのようだ。

そうだ。やるしかないんだ。

もう後が無い事は分かっている。

体内の癌が僕を蝕んでいるのは事実だ。

ならば最後に、自分に区切りを付けるためにも、旅立とう。

残り少ないエネルギーを使い果たした時、後悔だけは残したくない。

ワインボトル越しに太陽を見た。

どうどうと昇っている朝日に、勇気を感じた。

そして僕は、海を出た。

第二話：春の蛍と流星

目が覚めると目の前にはバスの運転手が私を起こしていた。

「……あーすみません」

「何度起こしても起きないので死んでいるかと思いましたよ」

「あはは、すみません」

一度深く礼をした後私は自動改札機に小銭を何枚か入れバスを降りた。降りたところはどこか殺風景な田舎だった。田園がびっしりと並び、綺麗な平坦な村^{フラット}だった。

軽く背を伸ばすと関節がぱきぱきと鳴った。さっきまで変な姿勢で寝ていたからか、肩が凝っている様な気がした。まあ、少なくとも田園みたいに平坦な胸の所為ではないと確信している。

あはは、次からは豆乳を飲んで置こう。

男って胸が大きい方が好きだって言うし。最低目標最初から三番目くらいだよな！

そんな一人喜劇をしていると後ろから笑い声が飛んできた。ぱつと振り向くと、一人の男性がいた。年からにして二十代後半だろうか？ 私は初め警戒心馱々漏れで男性を見た。

そんな視線に気付いたのか男性は一つ咳払いし、笑うのを止めた。

「どうも、この村に何かの観光かい？」

「いいえ、ただの旅です」

恋人探しのと言わなかった。自分探しだといわないのかと言われそうだったからだ。少なくともこの人には絶対言われるだろうと思った。

「へえ、こんな年なのに旅かあ。いいね」

「普通警察に言いませんか？」

そんな反応に男性はきょとんし、そしてにたりと笑った。

「実は僕が警察官なんだけどね」

「……まじですか？」

「本当ですよ」

さんさんと降り注ぐ太陽光線。
旅して早々私はすぐに捕まった。

「……で？ 私を帰さないんですか？」

「ん？ 帰されたい？」

いいえ、と即答すると男性はぶつと息を噴出し笑った。

どこが楽しいのかよう分からないなあと思った。少なくともこの人は私を家に帰すつもりは無いらしい。

このまま犯されるつてのはまずありえない。相手も公務員だからそんな事はできないし、あつちは二十代。もう結婚でもしている時期だろう推測を立てる。

「そこまで警戒する事は無い。こっちだってそこまで鬼じゃないし、逆に君くらいだと旅したくなるのは仕方ない事だろうと僕は考えているよ」

「え？　と言う事はそちらも旅したことあるんですか？」

まあね。と彼はやや困ったような笑顔をした。私も少しだけ親近感が湧く。

少しだけ、心を落ち着かせて私は問いかけた。

「何処に行つたんですか？」

「んー、北海道かな？　高校卒業して、すぐにバイクの免許とってスーパーカブで北海道まで走った覚えがあるよ」

「え、それ凄いじゃないですか！」

「まあね、一般道だから二カ月くらいはかけて走ったね」

私は喰い入るように彼に詰め寄った。

「やっぱ凄かったんですか？　北海道って寒くなかったんですか？」

「ちよつと君落ち着いて……」

おつと、私とした事が……私はすぐに椅子に座り、少しだけ反省した。

「まあ、北海道に入る前にスーパーカブは壊れたんだ」

「え？」

「僕の旅は終わって無いんだ。途中でバイクが壊れてもう歩けなくて食料もお金も底に付き、そして警察に捕まってこの場所に戻った」

「……」

彼は悲しげな顔をした。そんな顔を見ると心が痛くなる。ズキズキと痛んだ。

「それからだねこの村から出られないのは、僕は警察官となつてこの村に定着する事にした」

「どうして、北海道に行こうとしたんですか？」

私を見る顔はどこか儚い、触れると溶けてしまいそうな雪みみたいな表情をした。

「彼女がそこにいたんだ。彼女は昔この村から出て行つて北海道で住む事にしたんだ。僕は会いたくて会いたくてたまらなかった。手紙を送つて、送つて、最後には君に会いたいつて書いていたんだ」

懐かしいなと彼は笑つた。

「そしてある時、彼女から手紙が来たんだ。『自分の足で来たら結婚してあげる』と言しか書いてなかった。僕は懸命にバイクの免許を取つたんだ。だけど会えなかった」

「奥さんいるんですか？」

「その彼女じゃないけどね」

あはは、空笑いする。私は机にある、ラバーケースに挟まれた写真を見た。

昔の写真、フォーカスはバラバラの幼い二人の写真。

「自分の足で来れ無かつたって事は、結婚すら出来ないって意味

だ。僕はその約束を守れなかった事に後悔したんだ。その時に見守ってくれたのは今の奥さんなんだよ」

「愛されてますね」

愛されてますよと彼は言った。

「今日はここで泊まっていけばどうだい？　僕は夜もここにいるから相手にされる事も無いだろう」

「いやです。男性のすぐ近くで寝ると襲われそうな気がして寝れません」

「残念だね、僕は君みたいな年は守備範囲では無いんだよ」

一本取られた。例えるなら、ボーリングで九本取られて最後の一本が真ん中にあるようなものだ。

「それに今日はここで寝たほうが君にとってもいいと思うよ」

「え？　何があるんですか？」

それは夜になってからの楽しみだよ。と彼はイジワルそうに笑った。

夜になると、彼は私に目を閉じろと命令をした。しびしび私は目を閉じると私の両手が彼の手に掴まれた。

ときどきはしなかったけど、どこか懐かしい感触だった。

肉刺がつぶれて、固まったような歪な硬さのある手。

お父さんの手みたいと、思った。

真っ暗の中私はその手に引かれていた。ゆっくりと動くと、すれ違う空気。足元で紙を踏み締める様な音。

どうやら少し高い山に登っているようだった。

「じゃあ、このまま座って？ 後ろにベンチがあるから大丈夫だよ」

その言葉を信じて座ると本当にベンチがあった。

「じゃあ目を開けてごらん」
「……凄い」

一面光の粒子の世界。としか言いようが無かった。目の前が真っ暗なのに緑色の蛍光色のような光が綺麗に漂っている。

「この時期は蛍が飛び交うんだ」
「春なのに……この近くに綺麗な川があるんですね」
「ああ、そんな事分かるのかい？」
「まあ、現役高校生ですから」

とやり取りすると、一つの光が私の鼻頭に止まった。少しだけくすぐったくて、思わず指でその光を押した。するとその光はまた空中へと飛び立った。

「……本当に綺麗ですね」
「そうだろう？ 僕はここがお気に入りだったのさ。昔の彼女がここを教えてくれてね。それ以来ここは僕の秘密基地さ」

だからここを教えたのは君だけだ。と暗くて見えなかったけど彼は笑っているに違いない。

私は空を見上げると空にも蛍が沢山飛んでいた。何千何億とある白い光は天の川を作り出し、きらきらと光っていた。

あ、流れ星。

あの彼は元気にしているのだろうか？

「昨日はどうもありがとうございました」

「いいや、こちらもありがとう」

朝私は鞆を空に掛けて彼に別れの挨拶をしていた。彼の目にはクマが出来ていた。本当に寝ていなかったらしい。

「じゃあ、私はこれで」

「ああ、そうだ。また来いよ。旅の途中にでも」

「……ええ」

「あと、一つ聞いて言いか？」

私は彼を見た。朝はまだ肌寒く、肌がピリピリと締まるような感覚があった。

「君の目的地は何処だ？」

「……彼の元ですよ」

「……僕と同じ目的か」

「でも違いますよ？ 居場所が分からない彼の元です」

そんな目的地は存在しない。ましてや移動する目的地などそんなものは目的地ではない事は分かっている。
だけど私の目的地はそれしかなかったのだ。

「そうかじゃあ気を付けて行けよ」

「はい。本当にお世話になりました」

私は一礼し、また一歩旅の足を進めた。

第二話：春の蛭と流星（後書き）

さて、寝不足決定ですね。後は頼んだ！ 竜皇神さん！
全ては君にかかっている……！ （事尽きた

あ、そういえば竜さん新しい名前考えてたでしょ？
こう言うのどう？ 『春一番』

第三話：夜道の明かりに導かれ

海岸沿いの道をずっと行くと、山道に入った。

夜道はどこかさびしい雰囲気で、背筋が凍る。

僕はあれからおばあちゃんの家に向かった。

とりあえずこの服装では街に出られない。

僕は病院着のままだった。

とりあえずおばあちゃんの家で食料と服を確保しなければ。

おばあちゃんの家はここからとても近かったはずだ。

僕には後が無いと思い、両親が配慮したのだろうか。

まあそれでもいい。もう親は関係ないのだ。

上り坂はとても苦しかった。

病院で寝たきりのままだったためか、体力が落ちている。

僕はこんなではなかった。

小学校に通っていた頃から水泳ではクラスの誰にも負けなかった。

大会でも上位に食い込むような選手だった。

それが今ではこれだ。

情けない。

上に走っている高速道路の明かりに導かれながら、やっとおばあ

ちゃんの家に通った頃にはもう朝になっていた。

壁にもたれかかるようにドアをノックする。

意気は上がりっぱなしだ。

「はいはい、どなたあ？」

おばあちゃんがそう言いながら引き戸を開けて出てきた。

「……ちよ、飯……」

僕の様子に動じることなく「はいはい」と中へ連れ込む。

どこか様子が変だ。

だが僕はそんなことを考えているような余裕はなかった。

夜通し歩き続けてきたのだ。

それこそ死にそうだ。

「お兄さん、どっから来たんね？」

口調もおかしい。

よくよく見ると、それは僕のおばあちゃんではなかった。
丸いしわしわの顔で優しい頬笑みをくれるおばあちゃん。

僕は今、他人にお世話してもらっているのだ。

「あ、その、人違いっていうか、その……」

どうにか謝っておかないと失礼だと思ったが、どうも口が言う事を聞かない。

「旅のお方じやろう？ 時々『泊めてくれえ』ゆつて訪ねてくるけれど、もう慣れとるよ」

「あ、そうなんですか……」

それならば話は早い。

僕も一応旅人だ。理解されやすいだろう。

「お口に合わなんだらすまんの」

そう言つて出されたたくあんと白米をのどに流し込む。

あまりの勢いにおばあちゃんは喜んでいたが、いつまでもこうしてはいられない。

「あの、ごちそうさまでした」

「はいはい。よお食べたなあ」

「あの、ちよつとお願ひがあるのですが」

「ん？ ゆつてみ」

ここで僕は身ぶり手ぶりを加えながらいきさつを話した。

病院での事、海の彼女の事、山道がつかつた事、おばあちゃんにお世話になつた事。

彼女に会いたい事、そして、もう僕の命に後は無い事。

謝る時には動いてくれなかった口も、上手く機能してくれた。

流れるような言葉の波に、おばあちゃんはうんうん、と頷いてくれた。

「で、このままだと街に出られないから、服を貸して頂きたいんで

す」

「ほうか。ならこつち来んさい」

おばあちゃんは笑顔で親身になって聞いてくれた。
親達の偽物の笑顔ではない。

僕はおばあちゃんに先導されて押入れの方へ向かった。

「これ、孫たちの服なんよ。もう孫も大きゅうなつて入らんらしい
けえ、これに着替えんさい」

差し出されたＴシャツとズボンを貰い、早速着替えた。

少し小さく感じたが、これで街に出られると思ったなら我慢するレ
ベルの問題でもなかった。

「ありがとうございます」

「あとこれも。少ないけどな」

そう言つて少しの小遣いをもらった。

「銭湯とか食事とか、これで少しはもつと思うけん、大事に使うん
よ?」

「ありがとうございます!」

ここまでしてもらつて何かお礼をしなければならぬ。

そう思つて聞いてみたが、意外な答えが返ってきた。

「そんなんええよ。強いて言うなら、また遊びに来んさいね」

病室でいつのまにかひどく現実主義になっていたのか、現金を要
求されるかと思つた。

周りにほとんど友達がいなくて寂しいのだそう。

僕は、彼女を見つけたら一緒にまたここに来ると約束し、深々と
礼をした後、家を出た。

そして家を出た途端に気付いた。

ここは僕のおばあちゃんの家とは雰囲気全く違う。

全然知らない、薄暗い村だったのだ。

第三話：夜道の明かりに導かれ（後書き）

うまく思いつかない^^；

やっぱり行き当たりばったりはむずかしいなあ。

「春一番」かあ……なんかしっくりきませんね。すみません。

第四話：歩く国家公務員

てくてくと歩くと車が通れそうな道に入った。……と言っても車は一切通っていないかった。

とほほ……ヒッチハイクも何も出来ない。

昔の番組であつたような気がしたんだけどなんだっけ？

電波何とか……後で調べておこうと思った。

道路には四十と黄色い文字で書かれていた。ここはそんなに信号無いから結構飛ばせるのと思った。私は右左と道路を端から端まで見た。

うわー。歩きたくなくなるなあ。

一応鞆の中にはヒッチハイクと言う単語と、右手を書いた紙がある。

もしもようであつて、そんなに使う事も無いだろうなと思いつつ道路の真ん中を歩いた。

なんか変な気がするよね。道の真ん中を歩くなんて滅多に無いからなあ。

そんな事をしているとなんか悪い餓鬼に見えてくる気がした。道路交通法違反にでもなるのかなこれ。

「おーい、そこのお嬢ちゃん何をして居るんだい？」

ぴくつと肩を揺らし、振り返る。そこには身軽な服装をした。中年の男性だった。

「そんなところにいると轢かれるぞー」

やや出た腹を揺らしながら私に近づいてくる。なんか旅を初めてかなり男性発生率が多いような気がするなと思った。

「道路交通法違反になりますかね」

「いや、本当はここ車すら通らないからね」

「あはは、閑散としていますね」

そうだねえと相槌を打つ彼は健康そうな汗を流していた。けどそんなに近寄らないで欲しいなと思った。
加齢臭って言うしね？

「一緒に歩きませんか？ その歩き方だと、膝を壊しますよ？」

「え？ 歩き方でかわるんですか？」

「ええ、そうですよ」

んじゃよろしくお願いします。と私はお辞儀をした。

「何でこんな歩くのって疲れるのですか？」

「あはは、無い筋肉を使うからだよ。無理しないでゆっくりと歩けばいいよ」

すたすたと歩く彼は綺麗なフォームで歩いて……いるのかどうか分からなかった。私と全然歩き方が変わらないのに彼は疲れないうろっ？

不思議でたまらなかった。

「歩き方はこう、踵からつけて親指まで重心を移動させて歩くそうすれば足の筋肉とか全然使わないよ」

「え、ええ？　こうですか？」

「違うね。だからこうですよ」

全然違いが分からない！　歩きのリズムとか、腕を振るとかそんな詳しく言われても凄く困るんですけど……。

「まあ、しばらくはそう言う歩き方をすれば大丈夫ですよ」

「そう…ですか」

私はへとへとだ。脹脛が石みたいに張っている。

「はいこれ、ぬるいけどあげるよ」

渡されたのはキャップが開いていない生ぬるいお茶だった。私の鞆には飲み物が無くて、少し困っていたのだ。感謝を言い、口を付けて飲んだ。

何キロ歩いたのか良く分からなかったが、かなり歩いたと思う。

「そういえばどうして歩いているんですか？」

ん？　と彼は変な顔をした。

「ああ、どうして歩いているかね」

「はい」

「ダイエットですよ」

それは見て分かる。

どうしてこんなところを歩いているのかを聞きたかった。勿論彼は何も気にしていないようにまた歩き出した。

「本当は他の人に内緒なんですけど」

「……」

「僕は国家公務の歩く人なんです」

「……は？」

ポケットから財布を取り出し、名刺を出した。
道路交通省と書かれた名刺。

「どうしてこんな事をしてるんですか？」

「ええつと、趣味と言うか……道路の設備がちゃんと出来ているか歩いてみる人なんですよ。どこか壊れてるところが無いか、後道路の標識が錆びて見えていないか……などを見る人ですよ」

「車で見れば良いじゃないですか」

「車じゃダメですよ」

「どうして？」

彼が言うには歩くときの視界と車の視界ではかなり違うらしい。
速さの問題だろうか？

「あと、歩いているほうが健康にいいしね」

腹が出てる彼にそんな事言われてもそんなに説得力が無かった。

「今日はすみません歩き方のお世話をしてもらって」

いいえ、いいですよ。と彼はにこやかに言った。

「そういえば君、どうしてこんなところを歩いているんだい？」

「あ、えつと……旅してるんです。自分探しの」

いいねえ。と暢気に言う。

このご時世、女子学生が旅するのは当たり前前の事なのだろうか？
訝しげに彼を見ると話を続けた。

「僕には娘がいたんです」

それは突然だった。

「その娘が高校卒業してからかな？ いきなり旅に出るとか言うてね。自分の資金を全部はたいて海外に出たんだよ」

「意外と無謀ですね」

「そうだろう？」

もし私が旅していなかったら腹を抱えて笑っていたに違いない。
私と同じ身分でしかも現在進行系と言う事に共感めいたものがあった。

「今は音信不通。消息不明だけどね……そんな時、君に会った。
いやー、本当に夢みたいだったよ」

「は、はあ」

妙に足が浮いているような気がしてならなかった。

私は彼と別れてまた歩きだした。

前とは違う妙に疲れない感じ。

そんな事を三十分もしていると、後ろから車が走ってきた。私は鞆の中からヒッチハイクの紙を出そうとしたが、鞆から出すのを止めた。

車は私を横切っていき、だんだん離れてゆく。

これでいいのだ。そう思いながら私は鞆を背負い直す。

たまには歩くこともいいころだね。そう思いながら歩く人を出した。

第四話：歩く国家公務員（後書き）

ダイナマイトっていいよね。

第五話：大男とアイスキャンディー

朝露の残る竹藪を進む。

地方でも開発が進んでいる現代、こういったところにも竹が生い茂っているのかと思うと、日本もまだまだ捨てたもんじゃない。

山道が獣道に代わる頃、登山客であろう、重そうな荷物を持った大男に出会った。

「すみません。ここから街までどのくらいですか？」

そう。僕は今、街を目指している。

街に出て、徹底的に聞きこみをするのだ。

そうでもしないと、この旅の目的に一步も近づけない。

この山を進んでいる時でさえ彼女の後姿が不意に浮かんてくる。

「ああ、それなら逆だ。君が今来た道をそのまま下ると良い。私も今下る所なんだ」

どうやら僕はちょうどいい時にちょうどいい人に出会ったらしい。それにしても今までの苦労はなんだったんだ。

ただの時間の無駄遣いだったのだろう。

「そうなんです。助かります」

「よかったら私についてきなさい。見たところ登山客ではなさそうだし」

そう言いながら大男は舐めるように僕を見る。

「あつ、ありがとうございます」

こうして僕は彼と一緒に、来た道に戻った。

しばらくすると土の道路から整備された黒い道路が見えてきた。整備されているとは言ってもヒビはいたるところに伸びており、時々掘ったような穴もある。

ガードレールは曲がっているし、時々それも無いところがある。これを見て日本が最先端の技術を駆使した先進国だとはとうてい

思えない。

一部の裕福な層の人間が何不自由なく暮らせる国、日本。これじゃあ社会主義国と変わらないじゃないか。

そんな事を頭の中だけで声に出しながら道路を歩く。

溪流沿いのマイナスイオンは確かに気持ちが良いものだ。

自分が癌だった事もいつの間にか忘れていた。

「君はどうしてあんなところにいたんだ？」

大男が荷物を背負い直しながら言う。

「旅です。僕はもう後が無いので」

「後が無い？」

大男の表情が一変する。

「はい。実は癌なんですよ」

「そうは見えなかったなあ」

いつの間にか腕を組み直し、遠い目をしている。

「そうですか？」

「うん。何かこう、希望を感じるんだ」

大男は自分の胸の前で両手を使って円を描いている。

「希望ですか……」

今の俺の希望とはまさに彼女のことだろう。

彼女の事を考えない日はここ最近ない気がする。

癌患者である僕がここまで歩いたりできるのも、きっと彼女という希望のおかげなのだろう。

溪流沿いの道を下ると、一軒の店が佇んでいた。

どこからどうみても古びていて、店の看板もくすんでいる。

店の前に置いてある大きめのアイスボックスに目が行く。

「君、食べたいか？」

大男は微笑みながら聞いてきた。

もちろんだ。歩きっぱなしで喉はからから、腹は減っている。

「食べたいです」

遠慮はしない。

せつかく言ってくれたのに、断ってしまつてはもつたない。

僕はその中にある水色のアイスクャンディーを引っ張り出した。

それとほぼ同時に大男が抹茶のアイスを取り出し、店の人に勘定を払っていた。

「君の出世払いだからね」

「はい」

いつ会えるのか、それとももう会えないのか、それはまだ分からないが、僕と大男は指きりで約束を交わした。

アイスクャンディーは懐かしい味がした。

入院する前によく食べたこの味が、まさかこんな歳に懐かしいと感じると思わなかった。

キーンとした冷たさが頭を叩き、僕は目を閉じながら溶けはじめたそれにかぶりついた。

「ああ美味かった」

わざとらしくそういう大男は、どうやらその大きな口で抹茶アイスを一気に食べたらしい。

食欲というか、さすが大男だなあと感動した。

こういう小さな感動が力を生むのだとナースに教えてもらったのを思い出す。

あの頃はまだ大人を信じる事ができていた。

だが今はそうではない。

多少は変わったかもしれないが、それでもまだ完ぺきには信用できない事もある。

あのおばあさんが食べさせてくれた飯だって、もしかしたら毒が入っていたのではないかという変な想像が時々心に巡ってきたりする。

そういう所はまだまだ病人なのかもしれない。
心に病を患っているのだ。

「ごちそうさまでした」

僕は大男に一礼して席を立つ。

「よし、じゃあここでお別れだな」

「えっ？」

ここでお別れだなんて聞いていない。

だがそれは性だろう。

もともと一緒の団体というわけではない。

それに付いて来てくれるという約束も交わしていない。

「まあまたいつか会えるさ。出世払い、忘れるなよ」

「あつ、はい！」

僕はそう言ったが、気持ちは複雑だった。

一歩も先に進めない僕。

店の前で立ちすくんでしまった。

「おい、どうしたんだ」

「いや、寂しくなるなあって……」

「そんな大げさな。もともと他人同士だろ？」

「まあそうですね」

「じゃ、無理するなよ。希望を見失わずにな」

「はい。ありがとうございます」

そこからは振り返らずに道を進んだ。

僕が癌患者だから同情でもしてくれているのだろうか、この旅に反対する人には今のところ出会っていない。

これは幸運ととらえるべきか、それとも不幸だととらえるべきか。少なくとも今は心が穏やかで幸運でしかないと感じている。

この調子で旅が進めばきっと彼女にも会えるだろう。

曲がってしまったっているガードレールから見降ろすと、そこには確かに現代の街並みが広がっていた。

第五話：大男とアイスキャンディー（後書き）

ダイナマイト？

格闘技のことですか？

第六話：福沢さん一枚と樋口君が五分の三枚位

と言っても、これは今までにかかったお金だ。

バスを乗り継ぎ巻くつて野口君が五枚と、食費と間食用と飲み物
用でかなり消費してしまった。

ああ、あんまりお金使わないようにしなきゃいけないよねと思い
ながらもついつい買ってしまう始末。どうしたらいいのかな？

と言つて、バスに結局乗っているのはどうかと思うのは私だけ
はないと思う。うん。私だけではない。

バスに乗っているのは大人って感じの女性だった。髪の毛がさら
さらでとても大和撫子みたいな後姿だった。

うわあ……凄い綺麗だなと思った。

私の腕を誰かが突付いた。

「おねーちゃんどこ行くのー？」

隣にいつの間にか座っていた少女、茶色に光る髪の毛が染めてな
いと言つ証拠。普通日の光に当たると赤色になるのだが地毛の場合
茶色は亜麻色みたいに綺麗な髪になる。

ちなみにこの少女は日の光に当たっていて亜麻色。

「んー？ ちょっとした旅ですよ」

「たび？」

うん旅だよって言うと、たびたびと連打するようになった。どこ

の可愛い子なのかなと周りを見ると誰もこの子を叱って連れて行くような人がいない。

「一人で乗っているの？」

「ううん。お母さんと乗ってるの」

そのお母さんはどこに居るんだよとつい突っ込みたくなった。しかし相手は私より年下。ぐっと抑えた。

「ねえ、どうして乗っているの？」

「お母さん、お父さんとケンカして出てきちゃったの私はお母さんについてきたの」

「……なんていうヘビーな」

そのお母さんについては何も聞かない事にしたい。

まあ、そんな事するとバスが終点に着いた。私はお金を払って、次のバス停を探す。

大体終点はバスターミナルで、どこ方面に行くバスが転々と止まっていた。

本当は新幹線とか電車に乗りたかったが、そんな公共の物をバンバン使うとお金何ざさつさと消えて行く。

財布の中身が少しだけ痩せてきたなあと思い私は近くにある銀行でお金を引き落とした。

今度はこの方面で行こうと思いつながらそのバス停に並んだ。

「あ、あのおねーちゃんだ！」

幸か不幸かあの少女がいた。

その少女は私を手招きしてこっちに来说いと言う。私は静々と遠慮がちにその子に近づいた。うう、周りの目が痛い。

「どうしてここにいるの？」

「おかーさんがこっちにジツカがあるって言うからこっちにしたの」

ジツカ？ ああ、実家の事か。発音と言つかイントネーションが少しだけ違いますよ？

少女の左に繋がれている手をみた。その手を伝って見ると。

「あ、こんにちは」

「こちらこそ」

手を繋げていたのはあの大和撫子みたいな後姿の人だった。しかも顔が綺麗。胸も……言わない絶対言わない。

「この子の面倒をみてもらってありがとうございます」

「い、いいえ！ こちらこそ暇つぶしに相手してもらったので良かったですよ」

「ねえおかーさん喉渴いたー」

一名空気を読めて無い子がいました。

しかしそのお母さんは百二十円をその子に渡す。亜麻色の髪の子はわいわいと騒ぎながら自動販売機に向かって行った。

「あの子から聞いたようですね。私がケンカして実家に向かってるって」

「まあ、私が強要したわけじゃないですけど」

「まあ、ケンカはいつもだから仕方ないわよ」

少女を見るお母さんは、とても綺麗だった。

「あの子ね今の夫の子じゃないのよ」

「え？」

「シングルマザーだったんだけど、あの子の父親が蒸発して私とおなかに子供を置いて行ったのよ」

「……それは大変でしたね」

「ええ、でも今の夫とケンカしてるけどそんなに仲が悪いわけじゃないのよ？ ただよく喧嘩して共に冗談が言えたりとか、それをちゃんと相手も分かってくれているのよ」

「そうなんですか」

「まあ大恋愛の末の結婚だったしね？」

そうですかとしか言えなかった。そして少女はペットボトルを持って帰ってきている。そのペットボトルは明らかに百五十円の筈なのにどうして買ってこれたのかは定かではない。

「……恋ねえ……」

そう思うとあの海での少年を思い出した。

隣に居ても全然気にすること無く一緒に時間を過ごせる。そしてなんか妙に馬鹿っぽい喋り方と、飄々としたと言つか、なにか不思議な雰囲気醸し出している少年。

あの子は今どうしているのだろうかと思うと、心が痛かった。最後の方で見たあの紙がハッキリと覚えている。

彼は生きているのだろうか？

癌については良く分からないが、もし彼が生きていたら、短い間だけでも一緒にいたいと思った。

そして私に新しい出会いを与えてくれるバスが来た。

第六話・福沢さん一枚と樋口君が五分の三枚位（後書き）

注）樋口一葉は女です。多分。

ダイナマイト横須賀とかどうでしょう？ 意外とフアンキーな名前だと思っんですが……。

第七話：シャッター通りのど真ん中

トラックに追い抜かされた後の排気ガスはいつ吸い込んでも気持ちが悪ものだ。

山を降りると、寂れた町が広がっていた。

空気は山中ほど澄んでは無かったが、都市部よりはだいぶ気持ちがいい。

その中を散策しながら彼女らしき人を探す。

いるかどうかは分からないが、確率はゼロではない。

限りなく気が遠いが、なぜかきつといつか会えるという自信があった。

灰色のコンクリート塀を伝って進む。

目に飛び込んでくるのは昭和を感じさせる風景だった。

クリーニング屋、足袋屋、文房具屋……。

そのどれもがカーテンを閉められ、人の気配さえ感じれるものはなかった。

きつとバブルの崩壊と共に一気に閉めたのだろう。

ガランとしている道を通り抜けると、大きなショッピングモールが目の前に現れた。

とてつもなく広い駐車場。

とてつもなく大きな建物。

そしてさっきまでは気配さえもなかった人影が溢れかえっている。ざわついている周辺の人間は、活気に満ちていた。

「ここらへんも随分変わったもんじゃねえ……」

ふと後から声が聞こえた。

振り返ると、見知らぬおばさんが周辺と不釣り合いに大きな建物を見上げて独り言を言っていた。

「あ、あの……」

ゆっくり近づいていくと、そのおばさんから二度見をされたあと

笑みを見せながら応えてくれた。

「あら、いい男ね。どうしたん？」

片手に手提げ袋をかけながら反対の手で口を押さえている。

おばさんポーズだ。

「さっきなんか独り言をされていたので、それがちょっと気になつて」

「ああ、あのね、ここらへんは昔は綺麗じゃったんよ。海も山も近いし、自然は溢れとるし、川には魚が泳いどつたし」

「へえ」

想像もつかない。

今はただのコンクリートの世界と化している。

「それでね、商店街も活気があふれてねえ……あの頃の方が貧しかったんじゃけど、今よりもなんか良かったんよ」

「そうなんですか……」

「昔はあたしも八百屋の看板娘じゃったんよ！」

今はどこからどう見ても世間話が好きそうなおばちゃんだ。

でもどこか顔立ちはすっきりとしているように感じる。

「うちももう閉めちゃってねえ。人が全然こんけえ。あ、そうじゃ、ちよつと付いて来てくれる？」

「あ、え、あ、はい」

強引に引つ張られ、再び寂れた雰囲気が漂う方へ向かった。

着いた所は商店街のど真ん中だった。

看板の大きな『八百屋』の文字が薄汚れていて、茶色い錆が固まっている。

「ささ入って入って。由美子お、ただいま」

そう言いながら僕を引つ張るおばさん。

ドアを開けて、靴を脱ぎだした。

由美子というのは誰なのだろうか。

もしかしてあの彼女だろうか？

淡い期待を寄せながら玄関の前に立つ。

「おかえり〜」

中から澄んだ声が聞こえた。

この声は、どこか聞きおぼえがある。

本当にあの彼女なのか？

思わず顔がほころぶ。

「ええ人連れてきたけん、ちょっと来てみんないやっ」

家の中から大きな声が聞こえた。

「ええ？ もう……」

背中を押されて中から誰かが出てきた。

背が高く、肌も白い。

髪は後で一つに結んでいて、こげ茶色。

顔立ちも整っている。

綺麗な方だと素直に思った。

綺麗だが、あの彼女ではなかった。

「どうかね？ うちの娘なんじゃけどねえ」

「はあ……」

そういうことが。

僕を婿につてか。

「もう、やめてよ母さん！ この人困つとるじゃなかあ。……ほん

まにすみません、うちの母が」

ぺこぺこと頭を下げられるが、どう反応していいのかわからない。

「ああ、いや別に……」

きよろきよろと目線を動かすが、一定にならない。

どこを見たらいいのかわからない。

おばさんが急に横からはいつてくる。

「まあそう言いなさんなや。中でお茶でも飲んで。ね？」

「あ、はい……」

由美子さんは困惑の表情だが、おばさんが力でねじ伏せるように説得し、しぶしぶ中に通してくれた。

家の中は思つた通りせまかった。
ちゃぶ台にお茶とせんべいが並ぶ。

「……なんだかごめんなさいね?」

向かい合うように座る由美子さんが申し訳なさそうにそう言った。

「いや、大丈夫ですよ」

こういう他なかった。

「お忙しいんでしょう?」

「いや、全然」

確かに人探して忙しいが、そういう意味の『忙しい』ではないよ
うな気がした。

「これだけ飲んでもらつたらもう帰つても大丈夫ですので。母も諦
めてくれると思いますので」

「は、はあ……」

どうしよう。

これだけ飲んで帰るのはなんだかもつたいない気がする。
でも僕は人探しに忙しい。

どうしよう……。

「どう? 会話は弾んどる?」

飴玉が入った器を持ってきて由美子さんの横に座るおばさん。

「由美子ねえ、こんな歳になつてもまだ結婚相手を連れてこんでね
え、あたしは心配で仕方無いんよ」「やめてよ母さん! あたしは
もうええの。独りの方がずっと楽じゃし」

「そんな強がつてえ」

親子の口げんかはとてもテンポが良い。

「家から出んで家事ばかりしとるんよ。じゃけえあたしがこうし
て未来のふ、ふいあんせを連れて来たんよ?」

フィアンセと上手に言えないおばさんはどこか微笑ましい。

反対に、由美子さんはいらいらが蓄積していつてるように感じた。
「いいお世話ですっ!」

それを見ている僕は、とうとう言葉が出なくなった。

「ほら母さん、困つとるよ。あの、名前知らんけど……」

「あ、ごめんごめん。お兄さん、独身かい？」

「あ、はい。一応」

まだ高校生だ。

男はまだ結婚できない。

「そうかそうか。何をしよったんね？」

「あ、人探しです。大切な人を探してまして」

そこから色々説明し、事態の重さを理解してくれた。

「そうかそうか。苦労されとるんじゃないや。職業は？」

「え、あ、高校生ですが」

それを言った途端に由美子さんとおばさんは顔を見合わせ、「高校生？」と声を揃えた。

「あ、はい」

腰が抜けたような表情で僕を見る二人。

「高校生には見えなかったなあ……」

「大人っぽい高校生じゃ……」

そこまで大人っぽいだろうか。

確かに水泳をやっていたから体はがっちりしている方だ。

高校生なら顔が大人っぽく見えるのも仕方ないか。

「てつきりどこかの大学生かサラリーマンかあ思おとったよ」

おばさんが愕然としている。

「ほんなら娘の半分ぐらいしか生きとらんんじゃないやなあ」

「ええっ??」

今度は僕が驚く番だ。

由美子さんはもつと若いのかと思っていた。

僕が一八だから、由美子さんは三十六か。

そうは見えない。

さすが元看板娘の娘さんだ。

「じゃあ結婚はまだ先じゃのう」

おばさんが言う。

「そうですね……じゃあ僕はこれで。ごちそうさまでした」
席を立った僕をおばさんは引きとめる。

「これからどこへ行くん？」

「とりあえず適当に」

「ほんなら今日は泊まっていきんさいや。体に気をつけんと」

「いや、僕はもう行きます。では、お元気で」

そう言って八百屋を出た。

相変わらず寂れている商店街に、燃えるような夕日がかかっていった。

第七話：シャッター通りのど真ん中（後書き）

ダイナマイト横須賀って^^^；

名前の件はもう大丈夫です。

このままこの名前で続けていこうと決めましたので。

樋口一葉さんは女流作家ですよね。

「たけくらべ」で有名です。

第八話：愛と言われたら君は何を思う？

私は私と答える。愛とはアイ。愛するのは自分。

結局は人皆自分が可愛いんだと思う。いや、そうとしか言い用が無いと思う。

実際人間が絶望の淵とかに追いやられたら自分を可愛がるに決まっている。

私もその無様な人間の一人に入り組まれている。

嫌になっちゃうよ。ああー、もう嫌だ。

私はバスから降りた。道路は人が通らない道をわざわざ選び、前に叔父さんから教えてもらった歩き方で歩いている。しかし、県外にも出ていないという事態。

うわー、四日もなつて出ないとは、やばいと思う。

普通二日位経ったら出てるはずだけど、出ていないのはどうだろうかと思う。

「はあ、これは少し落ち込むよねえ」

私の脳内計画では一日で外で出たかったのだ。と言うわけでもう初日に私の計画は瓦解している。ははは、すみませんね？ 私は計画を立てるとよく失敗するんですよ？

こりゃ目的の前にすぐ終わりそうな気がする。とやや不安げに思った。

これは結局、自分を可愛がって終わりなのかも知れない。

でもそんな事はもう嫌だ。

私はもうあの過ちを犯したくないんだ。だから外に飛び出したんだ。

自分の体が震えている事に気付き、自分の体を抱え、しゃがんだ。目の前が歪曲して気持ち悪い。貧血みたいな症状だった。

「あのー……」

「？」

私の顔を覗きこむ人がいた。私の顔がそんなに変な顔をしていたのかな…。

「大丈夫です。すみません心配かけて」

「いいいいえ、私、あんまり人を放っておけないので」

そうなんですか……と愛想笑いで言った。表情筋を無理やり動かした所為なのか、所々ひくひくと痙攣しているような気がした。

その人は、私と同じくらいの年で、高校の制服を着ている。

セーラー服で、赤いリボンがチャームポイントらしい。

彼女は鞆からハンカチを出す、私はそれを拒み、自分のハンドタオルを取り出した。

「名前はなんですか？」

「通りすがりの美少女ですよ」

と冗談で言う、彼女は変な顔をして私を見ていた。

あれ？ 私そんな変な事いったかな？ チョイスが悪かったかもしれない。

彼女はその後、名前を聞かなかった。

彼女はバス乗り場を教えてくれた。私はバス停の椅子に座り、彼女は隣に座る。

「えっと、見たところ私と同じくらいですけど、どこかに行くんですか？」

「んー、ちょっと学校をストライキして、自分探しの旅に出かけているですよ」

凄いですね。と彼女は素直な感想を言った。おお、なんか嬉しいかも。

「でも、帰ってすぐに補修ばっかの毎日ですよね？」

「うっそれは言わないで……、それは気にしないでいるの」

本当はそれを気にして旅をしているのに……。私は後ろ髪を引っ張られすぎているのかな？

「でも、良いですよ。何も囚われないでどこにでも行けるなんて……」

「そうかな？ 私は意外と後をひくタイプです」

「でも良いじゃないですか。私は親が怖くてどこにでもいけないです」

「お父さんが？」

「いいえ、お母さんが教育ママみたいで、こっちの言いたい事が言えなくて……」

少しだけ暗い顔をしていた。

「うーん……」

「しかも、大学ももう勝手に決められていて、私の行きたい道とか耳にも入れてくれないし」

「どこ行きたいの？」

「芸術家です。絵師にでもなろうかと思っていて」

へえ、と私は相槌を打った。

「絵と違って結構お金かかるでしょ？ キャンパスとか油絵とか

……」

「それは分かっていますけど私は絵が好きなんです」

私は黙った。

私は何処に行きたいと思っただろうか？ 私は何をやりたいと思ったか？

そんなものは何処にも無かった。私は空っぽの人形だ。

「いいなあ」

え？ と彼女は私に聞いてきた。

「私ね、これをするまで何も目的が無かったんだ」

「……」

「クラスの空気に流されて、何かをしようと思ってても何もする事が無くて、結局は何も欲望が無い存在なんだ」

「そうですか」

「でもね、恋はしたいってずっと思っていたんだ。人に恋をする

事で何か得られると思ったんだ」

変だと思うでしょ？ と私は彼女に問う。

「でも結局はいろんな人に恋をしたけど何かを得られる事も無かった」

だから旅をしたんだと私は付け足すように言った。

「私、貴方の事尊敬します」

「へ？」

私、貴方の生き方に尊敬します。ともう一度言う。私は笑って、
選ばないほうがいいよと答えた。

「だって、自分の思った事をやろうとしているじゃないですか。
そんな有言実行な人はそういないと思います」

「……」

私を認めてくれる人がいた。思わず照れそうになり、目を背けて
しまった。

バスが来る。私は立ち上がり、そのバスを待った。

彼女に背を向ける状態になる。勿論彼女の視線が私の背中を刺し
ていた。

「ありがとう」

一言、私が言える事がそれだけだった。

バスが止まり、扉が開く。私はその階段を上り、整理券をとった。

彼女は、この後どうなるのかは私は良く分からない。

だけでも少なくとも彼女はお母さんに立ち向かっていくのだろう。

そう思うと思わず口が綻んでしまった。

バスの扉が閉まる。もう声が届かないだろう。

そして私は振り返り、彼女の姿を見た。

目が合う。私は微笑み、口を開いた。

声は出さなかったが彼女には私が何を言いたかったのか分かるだろう。

バスは動き、私をまた新しい人の元へ連れて行った。

「……あ」

しまったこのバス……。

「私の町にいくじゃない……」

……ガッデム。

第八話：愛と言われたら君は何を思う？（後書き）

どうも斉藤です。

かなり更新遅れてすみません。

後は頼みましたよ。ダイナマイト横須賀さんw

ちなみに問題です。『私』が彼女に言った言葉はなんでしょう？

第九話：本屋さんで雨宿り

空はいつしか灰色の雲に覆われていた。

古びた商店街を去った後、またさっきのショッピングモールに戻った。

とりあえず手当たり次第探すんだ。

彼女も、あの海にいたという事はこの辺の住民のはずだ。

そういう確信は無いが、可能性はある。

今の僕には何も無いから、何かを失う心配もない。

唯一失いそうなのは自分の命だろうか。

こうしている今でも病は確実に僕の体を蝕んでいる。

ショッピングモールの自動ドアをくぐると、不自然な涼しさに身ぶるいする。

こういう大型の店にはどうしても季節を感じられない。

とりあえず一階を散策する。

薬局にはほとんど人がいない。

店の前で洋服を見ている人の中にも、彼女らしい人は見当たらない。

本屋の中に入ると、かなり大勢の人々がいた。

とりあえずその中で彼女らしき人を探すことにした。

一歩敷地内に入ると、独特の静けさを感じる。

旅行、レジャー雑誌の欄を抜け、公務員試験や資格試験の参考書の棚を曲がる。

高校・大学入試対策の所にも彼女らしき人はいない。

遂には小説や経済書の欄にもそれらしき人物は見当たらなかった。

「ここは違うか……」

そう考えた僕はすぐに本屋を出て、エスカレーターで二階に向かった。

二階に到着してすぐに目に飛び込んできたのはスポーツ用品店だ

った。

有名な水泳選手のポスターが僕の目をくぎ付けにする。

僕も病気じゃなかったら自由に泳ぎまわれるのに。

日常茶飯事が遠い夢に変わったことに改めて気付かされ、溜め息をつく。

彼女はスポーツが好きなのだろうか。

もし好きなら、どんなのが好きなのかな。

できれば水泳が好きだったらいいな。

彼女と再会した後、ちゃんと病気を治して、一緒に泳ぎに行く。

そんな想像を掻き立て、僕は歩き出す。

スポーツ用品店の中はとても広かった。

野球用品、サッカー用品、水泳用品、陸上用品、テニス用品。

家族づれが多く、どちらかというと男性の方が多い。

ここも違つとみて、店を出る。

フードコートを抜け、雑貨屋を通り抜ける。

特に彼女らしき人は見つからず、エスカレーターで三階に向かった。

そこはとうとう立体駐車場だった。

家族連れが何組かいて、もちろん彼女と同じくらいの年齢の人もいるが、いくら探しても彼女はいなかった。

柱の間からのぞく空はどす黒く、音を立てて雨を降らせている。

傘を持っていない僕は必然的にやむまではここを出ない事にした。とりあえず下に降り、フードコートを目指した。

家族連れは依然として多い。

カップルも何組かいる。

手をつないで僕の横をすぎていく。

そういう姿を横目で見ながら、彼女と僕を重ね合わせる。

もしこの想いが通じたら、あんな風に笑いあえるのだろうか。

フードコートには多くも無く、少なくとも無く、ほどほどに人が集まっている。

抗がん剤の影響なのか食欲はあまりないが、それでも何かを腹の中に入れておかなくともたないと思い、うどんを一杯注文した。

窓際の席に座り、番号札を机の上に置いておく。

左手で頬杖をつく。

頬が引つ張られて痛いだろうと思ったが、その頬肉もほとんど落ちてしまつて骨のようだ。

そうこうしているうちにうどんが届いた。

「うどんでございます。ごゆっくりどうぞ」

感情の入っていないお決まりのあいさつも、久々だった。

病院暮らしに慣れてしまったせいか、こういうなにげない事も懐かしく感じる。

「ありがとうございます」

自然に口からこぼれた言葉に、店員さんも微笑みで返してくれた。綺麗な女性店員だが、この人も彼女ではなさそうだ。

さつとうどんに目を移す。

一倍安いかけうどん。

でもそこからでる湯気に、僕は値段以上の重みを感じた。

もしかしたらもうこれを食べるのが今日で最後かもしれない。

ひと口ひと口を丁寧に食べた。

うどんを食べながら今後を考えた。

とりあえずこの建物の中には彼女はいない。

それは確かだろう。

雨がやんだら移動するとして、それまでは本屋で本でも読んでおく。

そう決めた僕はつゆを一気に飲み干し、腕で口を拭いた。

一階の本屋はさつき来た時よりも人が多くなっていた。

僕は実は本を読むのが好きだ。

入院中も本を読んではかりいた。

中でも特に好きなのが小説だった。

病気の僕でもその世界に引き入れてくれて、冒険したり友情を感じたり時には探偵になりきり……。

いくつもの世界を駆け巡って、いく人もの人と出会う。

そんな小説が、大好きだった。

最近はケータイ小説というのが流行っているらしいが、僕はそういうのは好きではなかった。

だいたいち病院内で携帯電話を使うことはできないし、空白が多い文体にも違和感を感じるからだ。

でも、一般人が一番小説家になって本が出しやすいのもケータイ小説だ。

そういう点では僕も魅力を感じる。

いつか元気になったら、この旅を小説に書き表して、彼女に読んでもらおうか。

その時彼女はどんな反応をするだろうか。

喜ぶだろうか。嫌がるだろうか。

夢は膨らむばかりだ。

こういうのは普通彼女が見つかったから考えるものだろう。でも僕の場合は違う。

こういうのが楽しみにつながり、生きる力を与えてくれる。

こんな体で旅ができるのもそういうことなのだろう。

彼女の存在には頭が下がる思いだ。

さて、『人を探す方法』っていう本でもないかなあ。

第九話：本屋さんで雨宿り（後書き）

その呼び方マジでやめてくださいよ^^；

なんだろうなあ……

「頑張つて」とか、「踏み出して」とか？

幕間：齒車

ぎちぎちと動く音が聞こえた。

それは人の命の音で、齒車の音でもある。

私は寝転び、懐中時計を見ていた。

真鍮の肌理細やかに細工された時計は、ローマ表記の数字で時間を記されていた。

とても儚く見えるこの懐中時計はもう十六年と三カ月も動いている。それは直径たったの三センチしかないバネのおかげである。

たった二回捻るだけで、それはもう半永久的に止まる事を知らない。

私とその懐中時計のバネを回した所為で、人は道を辿る事になった。

二人の少年と少女。

その二人はまるで^{世界}プレートにいる^{少年}長針と^{少女}短針。

会えるのは一日にたった二回だけのその酷過ぎる現実は、誰が見ても涙を流すに違いない。

悪いのは私なのだ。

私はその懐中時計を優しく抱き締めた。

小さな、美しくも儚い^{運命}時計。

その時計は^{運命}今何を示しているのだろうか？

それは私にも分からなかった。

第十話：過ちは後ろにあり、挑戦は前にある

街灯はぼつぼつと光っていて、それは星のような奇蹟だった。私はその街灯の下を歩いていた。

まさか自分の町に戻っちゃうとは……

まさかのまさか、バスに乗り込んだのは良いがそれは自分の町に戻るバスだったのだ。

不幸としか言い様が無い。

溜息を漏らす。春なのに、まだ寒くて白い息が出た。しかしその息は周りの温度に感化されゆっくりと消えて行った。

その息はまるで私のようだ。

周りに触発され、一緒にされ、他の連中と一緒にの事をしなきゃいけない。一時期そんな抵抗をした事がある。

その所為で私は腫れ物扱いされたし、先生からも同級生からも全て畏怖の目で見られる羽目になった。

実際今は言いたくない。これは本当に私を受け入れてくれる人しか言わないつもりだ。

「すぐに出て行きたいけどなあ」

生憎バスはもう終電で止まっている。その上、周りにはもう電気が消えていて就寝の様子。

インターフォンを押すのもためらった。

しばらく歩いていると、見知った道に入った。

通学路の道。

このまま家に戻ればもう外には出ていけないと思う。

このまま外にいればまだ自由と言う旅をすることが出来る。

二つに一つを選択にされた。三つ目は存在しない。

「……」

私は一步通学路を歩いた。塀伝いで歩く私は一発で職務質問にあう事間違いない。

しかし私はこんな所で捕まる訳にはいかないのだ。

「って、どうしてこんなところに忍び込んだのかなあ……私」

タイルの廊下、緑の掲示板が壁に掲げられ、いろんなイベントの話が画鋏で刺さっていた。

まるで蝶の標本でも見ているかのようだ。紙はいろんな色で彩られ画鋏で留められている。

「……懐かしいなあ」

ここに来たのは、五日振りになるのだろう。五日も来ないと言うのはインフルエンザ以来だと思う。

少なくとも、何もありやしないのに学校を休むのは初めてだった。学校の教室は四十人でまとめられていて、夏になると、人の体で部屋が熱気に包まれ、クーラーをガンガンにかけていたのに対し、冬はその熱気さえ出てこないでヒーターをたいていたものだ。しか

もそのヒーターの目の前に立つ同級生を見てとても羨ましかった。

「今はそんな季節じゃないからどちらも点けないけどね」

と一人ごちる。

それにしても学校の警報が鳴らないというのはとても可笑しい物ではないかと思った。普通は警報が鳴り響いて近所の方々大迷惑になるはずだったのに。そんな事が無いとはこの学校も落ちぶれた物だ。

少なくとも私は何も盗まないからいいけども、泥棒が入っても知らないからネ。

自分の教室に入った。自分の机がどうなっているか気になったのだ。

もしかすると何か書かれているかもしれないし、または何も無いかもしれない。

私の机は真ん中の列、四番目だ。

「……何も変わって無いよね」

何も変わってなかった。変わったと言えば、置き勉してあった教科書の位置が少しだけ違うこと。

誰かが使ったんだろうな。と思って私は教科書を手に取る。

勿論何処にも落書きなどは無かった。

「……期待外れかあ」

ぼやきつつ私は自分の椅子に座る。すると瞼が重くなり、すたと眠りに落ちてしまいそうになった。

こんな所で寝てたら多分、ばれるだろうな。

しかし、そんな抵抗空しく私は沈黙の世界へと落ちてしまった。

「……っは！」

目が覚めると、口から涎が垂れていた。汚い……。

袖で涎をぬぐい、私は走って逃げた。椅子とかは倒れてしまったけどそんな事を気にする時間など無かった。

時刻は七時。野球部の早朝練習が始まる時間だった。

朝の日差しがまだ微妙に暗く、鳥の声が優しい中私は鞆を肩に背負って走っていた。

まだ廊下で、靴下だから滑って走りにくい、その上時間は刻一刻と迫っている。

昇降口で靴を履き、外に出た。

まだ人はいなくて、まるで別世界に迷い込んだアリスのようだ。

言いすぎた。透明人間のようにだった。

誰もいない。誰も私を見る人はいない。

そんな開放感に私は打ちひしがれる。

「ははは……！」

心の底から笑えるような快感は愉快としか例えようがない。
私はそのまま駆け、門を飛び越える。

もうおさらばだ。こんないやな学校^{監獄}。

私は後ろを振り返らず、学校を後にした。

第十話・過ちは後ろにあり、挑戦は前にある（後書き）

ぎゃーす。

どえりゃー、時間くってもうた。

後は頼んだで！ 凜ちゃん！

第十一話：教室の明かりは希望の光

本屋で物語の世界にのめりこんだあと、その文庫本を一気に閉じて読了感に浸った。

あれから何時間経っただろうか。

人探しの本をとうとう探し出せず、好きな作家の小説を見つけては終始立ち読みをして時間を潰した。

僕がこの瞬間もしも傘を持っていたら、もしかしたら通りすがりの彼女に出会えたかもしれない。

そう思ってしまうと、どうも溜め息が絶えなかった。

だがそれもとうとう終わりだ。

空は泣く事をやめた。

瞼を閉じた空は暗闇に包まれたが、雨は止んでいた。

よし、行こう。

この辺りには高校が二校あって、そのうちのひとつに僕は在籍していた。

市立産業高校。

そこがここから近いと看板で知って、僕はそこに向かった。

思いもよらなかった。

病院に行くたびに車に乗らされ、あの海に見える病院までかなりの時間、じっと我慢して座っていたような気がしていたあの頃。

だが違ったのだ。

心理的な距離と実際の距離は違っていて、実際は山一つを遠回りしていただけたのだ。

もうすぐ僕の家だ。

鍵はもっていなかったが、いつも右から三番目の鉢に合鍵が入っている事を知っている。

寢床に迷っていたが、これで一応確保されそうだ。
骨だけになったような足を懸命に持ち上げて歩く。
思ったよりも希望は長続きしたようだ。

帰り道の途中、ある高校をみつけた。

それは母校の方ではなく、もう一つの方の高校だった。
この高校の名前は忘れてしまったが、よく文化祭にはふらふらと
立ち寄っていた記憶がある。

近くのバス停に大きなカバンを持った高校生が並んでいた。
ここの野球部だろう。遅くまでよく頑張っているんだな。

僕はその高校生達に姿が見えないように、学校の裏側にまわった。
嬉しい事に、ほとんど人の気配はなかった。

だがふと高校の方を見ると、教室がひとつだけ明かりをともし
ていた。

「こんな時間まで勉強を頑張っているなんて、すごいなあ」

僕の母校とは違って、勉強ができる高校だったことを思い出す。

さすが、という言葉しか頭に思い描けなかった。

僕も頑張らなくてはいけない。

勉強という分野では無いけど、彼女を見つけ出すという目標に向
かって努力をし続けなければならないと、教室の明かりを見て感じ
た。

それから少し歩くと、母校を見つけた。

あのクリーム色の校舎は、今は暗闇にひっそりとしているだけだ
った。

校舎にはもちろん誰もいない。

中庭に回っても、グラウンドを覗いても、人影は無い。

もちろんプールにも誰もいなかった。

鉄の網が行く手をふさぐが、僕はそれをいとも簡単に上った。

——と思ったが、実際は半分ほどしか上がれなかった。

病気のせい、体力は著しく落ちている。

それにこの旅のせいで足はもう限界だ。

ブロック塀に腕を付けてその上に頭を置く。

そのままぼーっとプールを眺めた。

まだまだプールの季節ではないせいか、空き缶が浮いていたりしている。

この時期のプールはともかく、一生入りたくないと思いつつも、毎年六月のプール大掃除を境にその念は一気に消える。

冬の間に筋トレしかできない我が水泳部は、この日からやっと泳げるといふ喜びに浸れるのだ。

そして夏まで猛特訓を続け、大会に臨む。

そこで引退をするのかと思いきや、秋の文化祭で『男のシンクロ』を全生徒の前で披露するために練習を重ねる。

競技とは一味違う面白さがあり、毎年楽しみにしている。

だが今年は違った。

僕は病を患ってしまった。

大会にも出られないし、シンクロも出られない。

何一つ思い出に残らない高校生活が、もうすぐ終わろうとしている。

プールに浮かんだ空き缶を眺めながら、この水面のように心は無にした。

波をたてず、ただただぼーっとする。

あと何回プールに出会えるだろうか。

あと何回学校に来れるだろうか。

あと何回友達と会えるだろうか。

夜が心を静かにしたが、それと同時に心に波をたてた。

なぜ昼間にあんなに希望に満ちていたのに、夜はそれができないのだろう。

脱力感で眠ってしまいそうだ。

プールには依然として空き缶が浮かんでいる。

第十一話：教室の明かりは希望の光（後書き）

急に『幕間』が入ってて焦りましたよ^^；

今回、初めてすれ違いましたな。

第十二話：WIND

音楽を聞いていた。何気なく入った喫茶店でのバックミュージックの曲が不思議なテンポのナンバーだったのだ。

恥かいたっていいんだ

泣くなよ 間違っていないんだから

でも恐怖やウソっぽい言葉なんか涙を拭うなよ

自分を嫌いになって終わっちゃうよ

そのナンバーは何気なく落ち込んだ子供に慰める様な曲で、誰かに向かって頑張れよと言っている様な曲だった。

「コーヒーです」

ウェイトレスが掌ほどのコーヒーを持って来てくれた私は軽く会釈をし、そのコーヒーを見た……なんて酷い顔なんだ。

一口すすって飲んだ。コーヒーの煙り方が美味しいのだろう。酸味も、苦味も美味く抽出されていてそれが甘みとなって舌を刺激した。難しく言えばそんな感じで一言で言えばおいしい。

私は、コーヒーの味には意外と五月蠅く気に入った店しか行かないのだ。

「これなんて言うメーカーですか？」

「いいえ、こちらは自家製です」

私はコーヒーをもう一度飲む。間違い無くこれは私の好みの味だ。

「コーヒーメーカーは普通の奴ですけどね」

「そうですか。でもおいしいですよ」

「自家製でも他の市販されている奴には劣りませんよ」

「そうに違いませんか」

私は店内の窓際にいて、空が見える。

悲しみに満ちた、曇り空だった。

「雨降るなあ……」

「そうですね……」

ウェイトレスはコーヒーをもう一杯持って来て私の向かいに座る。
私はそれを横目で見た。

「仕事サボっていいんですか？」

「生憎ですがこの時間帯とこの天気になると客はぐんと引くんです」

「そうなんですか？」

「ええ、なので貴方以外誰もいませんよ」

そう言えば周りの人は誰もいない。私と彼以外誰もいなかった。

彼はコーヒーに口をつけ、ゆっくりと飲む。

ウェイトレスは一本アホ毛が生えていてそれが愛嬌となっている。
細い針金みたいなフレームの眼鏡がコーヒーの湯気により白く煙った。

「……僕はこのコーヒーを昔から知っていたんです」

「……」

彼の眼鏡が曇っていて目が見えない。コーヒーを飲む。

「小学生のころに母さんと一緒にここに入っただです。母さんはこのコーヒーは他のコーヒーより美味しいと言っていて、よく飲んでいました」

「そうなんですか」

「まあ、マスターも意外とお茶目だったからすぐに気に入りましたよ」

彼は頬を掻いて笑った。

「…私もこれは気に入りますよ」

「ははは、それならまた来てくださいよ」

「ええ」

まあ、それは置いといて。と彼はジェスチャーをする。意外とこの人もお茶目だなと思った。

「それから僕は毎日行っただです。お小遣いとか色々叩いて飲みに行きましたよ」

彼は笑顔でつらつらと話す。

「それでここにバイトを始めたとか？」

「まあ、そんな所です」

「そんな所？」

雨がぽつぽつと降り出した。その内子供用の大泣きするのだから。私はそんな空を見て溜息を漏らした。

「そんな所って言いましたけど、何か違ってましたか？」

「……」

相変わらず、私は空を見たままだ。彼は沈黙を宿し、今か今かと言葉を発しようとしているのが気配で分かった。

「僕、目が見えないんです」

私は彼を見た。彼の眼鏡の曇りが消えていた。彼の目は黒く、私を見据えている。

ように見えるだけだ。

「生まれつき、弱視で全然見る事が出来ないんです」

「でも見えるように動いているじゃないですか」

「ここに毎日のように来てますからね。場所くらい把握できてますよ」

目を細め、微笑む彼。私は彼の目の前で手を振った。勿論反応すらない。

「凄いですね」

「いえいえ、全然普通ですよこれくらい」

細い腕を揉む。私の腕も細く長いけど、筋肉とかそういうのは無く柔らかかった。しかし彼の腕は細いが筋肉質だった。

「……」

沈黙が周りを包む。やんわりと漂うのは優しさのある沈黙だった。

雨はゆつくりと止んだ。空を見ると少しだけ明るくなって来ている。

「じゃあ、私行きますね」

財布を出し、小銭を出そうとするが、残念ながら小銭は無くお札ばかりだった。

「あーえつと……」

「ツケで良いですよ」

「え？」

彼は微笑み、コーヒーを飲み干した。

「また来るのでしょうか？ それならまた来るまでお金はツケで良いですよ」

「…ごめんなさい。ありがとうございます」

「いいえいいえ、困った者同士助け合つのは当たり前ですよ」

私はゆつくり席を立ち、扉へと向かった。

彼も立ち、ゆつたりとした歩き方で私の後ろを付いて来る。

扉が開いた。彼はきつちりとした礼を私にした。

「またのおこしをお待ちしております」

「こちらこそ」

私は微笑み、外へ出た。

雨の匂いが心地よく、大きく深呼吸した。

匂いが肺の隅々まで行きわたる。

前を見ると、何人かの人々が忙しなく歩いていった。

目の前を通る少年の姿が目に入った。

……一瞬彼かと思ったがそれは無いだろうと思った。だってもう彼はホスピスに入っている筈だし、外に入られないはずだ。

目標は県外だ。

恥かいたっていいんだ

泣くなよ 間違っていないんだから

でも恐怖やウソっぽい言葉なんかは涙を拭うなよ
自分を嫌いになって終わっちゃうよ

そのフレーズを口ずさみながら、バスを探さなきゃなああと暢気に
思考を動かし、ゆっくりと一歩踏み出した。

第十二話：WIND（後書き）

どうもかなりおくれちゃいました。

斉藤です。色々と忙しかったので、更新遅れました。

後は頼んだぞ！ 竜どん！（え！？

ちなみに、akeboshiのWindを聞いて見てはどうか？

第十三話：午前零時の交差点

あれから僕はずっとプールを眺め続けていた。

水面をぼーっと見ていると、なんだかリラックスできるのだ。

だが、それにももう飽きた。

僕はそのまま家に帰ろうと思ったが、それはやめた。

重要な事に気付いたからだ。

今家に行ってしまうと、親と遭遇してしまう。

あの信用できない大人たちは、また僕を病院へ戻すことだろう。

だから僕は、家には帰らず裏通りを通って街に出ることにした。

学校の裏の用水路沿いを真っすぐ行くと、駅や大通りが待ち構えている。

下水臭いこの道を通り抜けると夜の街だ。

それまではこの臭さも我慢していくしかない。

僕は急ぎ足でそこを通り抜けた。

午前零時の交差点はあまりにもがらんとしていた。

東京や大阪ならこんなことはあり得ないだろう。

彼女が夜中に徘徊しているとは到底考えにくい。

だが、確率がある以上、調べておく必要はあるだろう。

僕は大通りを歩き、アーケード街を歩き、徹底的に探した。

途中、何度もけばけばした鬱陶しい女性に声をかけられたが、突き放しては舌打ちを食らった。

最近この中心街も夜はピンク街と化している。

景観も損なうし、何よりも住みにくい。

どうせ奥の方では闇取引も行われているのだろう。

そうぜんと歩くＴシャツ姿の僕にはそんな所は似合わない。

ふと壁にもたれて休んでいたその時だった。

急に眠気に襲われ、足腰に力が入らなくなった。

そのまま瞼は閉じていき、意識は遠のいていく。
『へっ、これじゃあ酔っ払いのおっさんみたいだな』
僕はそう感じながら夢の世界へと落ちた。

——気付いたのは昼前だった。

店と店の間の薄暗いじめじめした所で眠っていたせいか、警察には見つからなかったようだ。

目をこすり、重い体を無理やり持ち上げる。

空は薄暗く、雨がしとしと降っていた。

屋根があつてよかった。

大事な手紙は濡れずに済んだようだ。

勉強に使うようなルーズリーフに、黒いボールペンで書きなぐるように書かれた字。

たった一言、『私の恋人になってください』という短い手紙。

だがこの手紙が僕の生き甲斐であり、希望でもある。

この手紙の彼女に会う日はきっと近いだろう。

神様も最後に僕の味方をしてくれるはずだ。

人通りが少ない大通りの隅の方に位置すること。

一体何の店なのだろうか。

大きな看板を見にそつと通りに出ると、そこには『喫茶店』と書いてあった。

「……え、何これ」

『喫茶店』の下にはアルファベットが並んでいたが、残念なことに読めなかった。

体力だけでなく、学力まで失ってしまった。

気分は重くなるばかりだ。

まだこの雨は止みそうにない。

というより、これからひどくなるだろう。

それまで僕はここで雨宿りする事にした。

雨はそれから本当にひどくなっていた。

時々雷も鳴った。

僕はそれほど苦手ではないが、彼女はどんなのだろうか。ひよっとして雨にぬれて風邪をひいているかもしれない。そう思うと不安で仕方がなかった。

そういう僕も実際今は寒い。

さすがにTシャツとズボンだけというのはつらいものがある。

どこかで上着をくれるような人がいればなあ。

鳥肌の立つ腕を組み直し、猫背になって壁にもたれる。

雨が止んだら銭湯に行こう。

確か近くにスーパー銭湯があったはずだ。

ポケットに入っているお金を確認する。

……ギリギリか。

銭湯に入ったらそこから先は本格的にホームレスのような生活になるな。

季節は梅雨だ。

年越し派遣村の時期ももうとくに過ぎている。

とりあえず僕はこの先長くは無い。

もしかしたら今日死ぬかもしれない。

だから、後先考えずにその場しのぎでもいいのではないだろうか？

そういう事を考えていると、若干気持ちが楽になる。

人間、気持ち次第で人生も変わるのだ。

もう一度手持ちのお金をみつめ、強く握りしめた。

雨はすっかりやんだ。

時々晴れ間をのぞかせる空は、あの日のように勇気をくれた。

さて、銭湯に向かうか。

喫茶店の前を通り過ぎ、大通りに出た。

第十三話：午前零時の交差点（後書き）

a k e b o s h i の W i n d を 聴 いて みた の で す が ……
英 語 ば か り で わ け わ か ん な っ た で す ^ ^ ;

や っ ぱ り 僕 は 7 0 年 代 後 半 か ら 9 0 年 代 ま で の 懐 メ ロ が 好 き で す。

第十四話：牛乳コーヒー百二十円（前編）

せつかくこの町に来たんだから、ちよつというものがあるなと私は思い薬局に寄った。

と言つても本当はあんまり言いたくないのだ。

ほら、あるでしょ？ 女の事が月に一回ほど強制的に起こるイベント。

あれは世界を恨む位につらいのだ。

ほかの人と比べて私はあれの痛みが強いと言つか。

……まあ、その話はいいか。

私は薬局からそそくさと出た。

つと、その前に色々と準備しなきゃ。

体臭を拭い去るために、銭湯へと向かう。と言つてもここはそんなに大きくない銭湯だ。名前は『スーパー正美^{ネームセンス}』。どんな名前才能なんだろうか……？ 風呂の数は三つ位。大きいのと、小さいの。後は水風呂。前にここに來た事がある。

「いらつしゃい、ああ、あのときのお嬢ちゃんじゃないかい？」

「ども、お世話になってます」

番台にいるおばあさんは一度顔をあわせるといつまでも覚えてい

ると言う驚異的な記憶能力がある。それなのにホウレンソウとコマツナの区別が全く分からなかったり、さらに、ケチャップとマヨネーズも間違ったりする。

「四年になるんかえ？」

「まあ、そんな感じだと……」

大きくなったねえ。というおばあさん。私は五十円を出すと、鍵をくれた。番号は三十四番。私の出席番号と偶然一致した。

「ごゆつくり、ちゃんと儀式はやっておくんよ」

「はい」

服を次々と脱いでゆくと、足の皮が捲れる事に気づいた。

「やっぱり歩き方が悪いのかな？」

と独り言を言いながら風呂場に入る。微妙に皮がひらひらとしていて、剥けた所と当たると敏感になったりしていた。

ここの銭湯は必ずしも風呂に入る前に儀式をしなきゃ行けない。かけ湯をしてまず体の汚れをとるのは当たり前だが、その後の行動が面白いというか、女性限定と言う儀式だ。

水風呂の水を汲み、男湯のほうへと水を撒く。

五メートル位の高さの壁から上は男湯とつながっているのだ。

最初は どうしてこんな事をしなきゃいけないのかよく分からなかった。

「ああ、どうしてこんなことするかと言うんと、昔から言っじや。

男は女湯を除きたがるんやって」

と言うことは、入ってこないように忠告をすると言うことだ。もし除いたら、水を撒くぞ。と言う事らしい。男湯から男たちの叫び声が湧き上がった。

あはは、男湯の人たちに合掌。

お風呂に入ると、暖かい水が体を包んだ。入念に腕や足を擦ったりした。

「それにしても四年かあ……」

そう、最初であり最後、ここに来たのは中学三年の春だった。そのときも同じようにプチ家出をし、一日位路上で寝泊りしたのだ。変なおっさんに絡まれたり、お兄さんにパンツくれないとか言われたが、そんなものは全部走って逃げた。そしてやはり中学三年は浅学だった。

お金に困り、二日目を過ごすことができなくなったのだ。腹をすかし物もまともに食べれない状態になったときに、ふらりとここに寄ったのだ。

そのときの私は犯罪を犯してでもその家から逃げたかったのだ。風呂に入って牛乳をとって逃げればいい。

そう思っ、中に入った。

番台がおばあさんだから逃げれると思った。ゆっくりと風呂に入り、体の汚れをとった。そしてゆっくりとせず牛乳コーヒを一本手にし、逃げ出そうとした。お湯で暖まっ

た手のひらにひんやりと伝わる。

「ちょっと待ち」

そう制止の言葉を言われても無視するつもりだった。

「お嬢ちゃん、今日は泊まってき」

それは明らかに警察に連れて行く言葉ではなかった。その言葉は私の事情を全部知っていてそう言っている。

そうに違いなかった。

周りはおじいさんとか、やかましいおばさんなどはいなかった。
おばあさんと私だけ。

「いいから、お嬢さん。あそこさおり」

言われるがままに私はそのおばあさんの言葉に従った。
どうしてだろうか？ あのおばあさんの言葉には嘘など一欠片もなかった。

手には少しだけ温くなった牛乳コーヒーがあった。

そして銭湯の閉店時間になっても、私はおばあさんの姿をずっと見ていた。

おばあさんは番台から降りると、暖簾を下ろそうと背伸びをしていた。私は慌てて、その暖簾を手にとり、おばあさんに渡す。

「おお、ありがとうね」

まっすぐ感謝の言葉に私は照れた。

おばあさんは暖簾を杖代わりにし、ゆっくりと歩いて行く。

「おばあさん……どうして私を警察に連れて行かないの？」

「あれ？ お嬢ちゃん物を盗ったのかい？」

「盗りました。牛乳コーヒーと風呂なんてタダで入りました」

ほっほっほと笑うおばあさん。私はそんなおばあさんを見つめていた。目の錯覚か、おばあさんの周りはほんわかと優しい空気に包まれている。

「お嬢ちゃん。物を盗ると言うのは、この銭湯から物を持って行った時じゃよ」

「……ごめんなさい」

「どうして謝る？ お嬢さんは何も盗っておらんよ」

私の手にはまだ封を開けていない牛乳コーヒーが在った。

「ごめんなさい」

蚊の羽音のような声で私はもう一度謝った。

「さあ、ご飯にしよう。今日はホウレンソウのお浸し、入り胡麻和えと、ご飯しかないんじゃない？……構わんかい？」

「ありがとうございます」

「言う必要もありん。わしは一人で食べるのに飽き飽きしてたところじゃ」

晩御飯は本当にご飯とお浸ししかなかった。私は箸を手にとり、合掌する。

おばあさんはプルプルとした手つきでお浸しを摘んだ。
私はそれを見た後、お浸しを摘んで口に入れた。

「……おばあさん」

「なんかえ？」

「これホウレンソウじゃないですよ」

「そうなのかい？ ホウレンソウじゃないのかえ？」

私の口に入っている物と、机の上にあっただお浸しはホウレンソウではなく、コマツナだった。

第十五話：コーヒー牛乳百二十円（後編）

結局、ハウレンソウもどきのお浸しを食べ終わったあと、私とおばあさんはお茶を汲み、一服をしていた。
家にはおばあさんしかいなかった。

「おばあさん、おじいさんとかいないの？」

「ん？ 辰夫さんは戦死したわい」

「……そう、ですか」

「まあ気にすんな。辰夫さんは私と十六の時に結婚しての、私がこの銭湯の番台をしたんじゃ」

「おじいさんは銭湯の人だったんですか」

「まあ。ええ格好しいの大馬鹿もんじゃったがな」

「あらら、おじいさん言われない放題だね」

全くじゃと言っておばあさんにはかりと笑う。私はそんな気さくなおばあさんの笑顔に釣られて笑った。

「プロポーズも、気障での。昔の私はイチコロだったわい」

「へえ、どんなプロポーズだったんですか？」

「ほほ、耳年増かいお嬢さん」

実際、私はそんなに耳年増ではない。

ただ人の恋は、三度の飯よりおいしいのだ。

「『わしのために子供を生んでくれえ！』と銭湯の中で言われたわ」

あははと私は笑った。おばあさんはふふんと笑い、お茶を啜る。

「それは格好いいと言うか……」
「大馬鹿もんじゃ」

そうですねと私は相槌を打った。

「だが、ほんまもん我真っ正直じゃったのお」
「そうなんですか？」

「おお、辰夫さんは浮気なんてしなくての、お酒を飲んでも性格なんてかわいいもんじゃ」

「おばあさんの夫らしいです」

「じゃが……いい男じゃ」

おばあさんの顔は若かった。
私も年老いたらこんな人になりたいなと思った。

その翌日私は、おばあさんに礼をし、家に帰った。
お父さんに頬を張り飛ばされ、お母さんにはがみがみと怒られ、
心身両方とも潰された。

しかし、その二泊三日は充実した家出だった。

「……いけないもうそろそろ上せちゃうな」

そう思って、私は脱衣場へ向かった。
体に纏わりつく水滴を拭い去り、私は服を着る。

休憩場所に出ると私とおばあさん以外誰もいなかった。

私はふと右手にある、ガラス張りの冷蔵庫を見た。

そこまで歩いてゆき、牛乳コーヒーを手にする。

「百二十円だったね」

「おお、そうじゃったな」

私は財布から、二百九十円を出した。

そのおばあさんの目の前で、牛乳瓶の蓋を開け、ぐいっと一気飲みした。

たったの四秒。

「ぶはっ。ごちそーさん」

と言って私は牛乳瓶をおばあさんの目の前に置き、走った。

おばあさんはその時どんな顔をしていたのかはよく分からない。
飲み終わった後に残る口の中の言葉。

それは、牛乳コーヒーの名前をコーヒー牛乳に変えたほうがいい
という評価なのか……。

それとも、おばあさんに対しての、感謝の気持ちか……。

どちらにしても、牛乳コーヒーの味と混ざり留まっていた。

旅に出て、七日梅雨の時期はもうすぐだ。

第十五話：コーヒー牛乳百二十円（後編）（後書き）

何で二つに分けた？

A。なんとなく。

第十六話：火照った体に冷たい甘さ

大通りを行くと、その一角に探していた銭湯を見つけた。

『スーパ―正美』

そう書かれた看板を横目にそこへ入る。

実は銭湯は初体験。

たまに見かける事はあっても、中に入ろうとは思わなかった。

その独特の雰囲気というか、庶民的な雰囲気にどこか慣れるのが難しかった。

番台のおばさんは本当にベテランという感じで、変にオーラをまとっているように感じた。

とりあえず前にいる男のお客さんのまねをして五十円玉を差し出す。

すると四十三番の鍵を渡してもらえた。

おばあさんが柔らかに微笑んできたので、一応会釈で返しながら奥へ進む。

着替える場所につくと、急に暖かい空気に包まれてハッとした。その直後には扇風機の冷たい風にやられ、またビクツとしてしまった。

キョロキョロしながら自分の番号を探す。他人から見たら不審だろう。

やがて見つけた番号のところに服を脱ぎ入れ、浴室へ向かった。

浴室への引き戸をガラガラと開けると、蒸気が顔を襲った。

「ああ、風呂だ……」

そう心の中でつぶやいた瞬間だった。

「ヒッ！」

頭の上から水をかぶり、間抜けな声を出してしまった。

一瞬で体は震えだした。

「は？ え？」

頭上を見たが誰もいない。

芸人のネタじゃあるまいし、これは一体どういうことなのだろう。

それ以上に、それを口々にしながらもどこか楽しそうにしているおじいさんたちが微笑ましかった。

「お兄さん、こっちにきんさいやあ」

ガリガリのおじいさんが手招きをする。

僕はそれを見て自分を指差すと、おじいさんは大きく頷いた。

「あんまり見ん顔じゃけど、どこから来たんね？」

僕はかけ湯をしながら返事をした。

「ちよつと言えないです。さすらいの旅人ですので」

少々恰好つけたが、『病院から逃げ出してきた』とは口が裂けても言えない。

さすらいの旅人というのを聞いてか、おじいさんは大きな口をいっぱいに広げて笑い出した。

「ほうかほうか。ほんなら今の、初めてか？」

今の、というのは頭上から降ってきた水の事だろうか。

という事はこの銭湯には昔からこんな心霊現象が起きていたのだろうか。

「あ、はい。初めて、ですね」

ゆつくりと湯に入りながら答えを返す。

足から入ったのだが、やっぱりこういうところの湯は温度が高めに設定されているのだろう。疲れた体にはよくしみた。

「ほんなら、どこまで行くんかえ？」

「そうですね……自分の満足するまで、ですかね」

答えになっていないのかもしれないが、これが本音だ。

彼女に会う。

それが僕のたったひとつの願望であり、希望なのだ。

それを叶えるまで僕は死ねない。死にたくない。

「若いもんはいいのう……おうそうじゃ、今日はどこに泊まるん？」

「そうですね……」

僕は口が止まってしまった。

そう言えば泊まる所なんてない。

仕方なく最低限の答えを選びだしてこたえた。

「野宿……ですかね」

その言葉におじいさんは目を丸くし、「ほお」と腕を組んだ。

「ほんならうち、来るか？ おばあさんと二人暮らしで毎日ちいと寂しくてのお」

これはラッキー！

最初に出会ったおばあちゃんの時みたいに色々助けてもらえるかも！

僕は迷わず首を縦に振った。

「牛乳コーヒー飲んでまっとなるからよお」

そう言い残して勢いよく風呂を出た。

意外と元気なんだな。いいことだ。

牛乳コーヒーって、コーヒー牛乳の間違いだろ。

僕は湯を手ですくい、顔を洗った。

それから数分後には風呂を出て、全裸の大人たちに混ざって体を拭いた。

来た時と同じ服をもう一度着た時には生温かくて気持ち悪かった。のれんをくぐると右手に小さな冷蔵庫みたいなものがあり、その更に奥におじいさんは座っていた。

股引に腹巻を想像していた僕は愕然とした。

なんと皮ジャンにジーパンをはいて足を組みながら牛乳瓶を傾けていたのだ。

あごが外れそう、というのはきつとこの事なのだろうと感じた。

おじいさんに近づくと、すっと立ってポケットに手突っ込んだ。
「かつこええ……」

多分、顔を隠せばモテモテだろう。顔を隠せば。

「お兄さんも一本飲むか？」

突っ込んでいた方の手からは小銭が出てきた。

「あ、すみません」

「一番のおすすめは牛乳コーヒーじゃけん」

「あ、そうっすか」

だからコーヒー牛乳だろ。

と突っ込みをしたかったが、それをしてしまうと骨が折れてしまいそうなので、代わりに作り笑いをした。

僕と同じくらいの女性が先に買って行って、しかも目の前で飲まれたので、買おうにも買いくかった。

その女性が走り去っていったのを確認して、僕はコーヒー牛乳を買った。

だがその時、目の前に入ってきたのは『牛乳コーヒー』の文字だった。

「ほんとに牛乳コーヒーだったよ……」

誰にも聞こえないような小声でそうつぶやく。

「はい、百二十円ね」

番台のおばあさんが手のひらを出してきたので、そこにちょうど乗つけた。

「はいありがとうございます」

僕は『牛乳コーヒー』を片手におじいさんの元に戻った。

すぐに蓋を開け、一気に流し込む。

風呂上がりの牛乳コーヒーはまた各段に美味しかった。

火照った体に流れ込む冷たい甘さ。

これは癖になりそうだ。

飲み干すと瓶を返し、僕はおじいさんにお礼を言った。

おじいさんは嬉しそうに微笑んで言った。

「孫がもう一人増えたみたいじゃ」

第十六話：火照った体に冷たい甘さ（後書き）

さて、前篇・後編にわけないで欲しいと言ったのはどこのどなたさんだったっけ……。

第十七話：とある夢物語は海へと

私はいつかはお花屋さんになりたい。

それは幼い頃にいった夢で、私はそれを実現させようと奮起していたことがあった。それは懐かしい記憶のようで、うたかたの泡よりも儚さがある。

私はバスの中で座り、道路の凸凹に揺らされていた。窓側に座り、ゴツンと頭を打ったところでゆっくりと目をあける。

空はあいにくの雨だ。その雨のせいで私の気持ちも雨模様ということをおぼれたいではない。

はあとため息を漏らすと窓は冷えていて窓が白く曇るがそれはすぐに消えていった。

バスの中には私一人、まるで夢の中にしているような孤立感。

夢を見ることが嫌いだ。

夢をみるといつも怖い夢と、一人だけの夢を見るから。

ある時にはたくさん人がいる夢を見るけどそれは私が存在していないという独立というか隔離感があったのだ。

「教室の私の机みたいだ」

そうつぶやくとそれは空気に霧散していった。

雨の中私はどこにも行く気はなかった。ただバスに乗ってバスを乗り継いで、そしてまたバスに乗って……。

そんな果てしないことをしてもバスはどこにも行かない。

私の乗るバスはすべてこの街運営のためどこにも行かないのだ。

ここは監獄だ。どれだけ動くことを許されてもそれは外に行くことができない鳥かごのようなもの。

たくさんの人々はそんな見えない鳥かごに買われているインコ見たいなモノ。

泣きたくなった。そう思うと心が痛い。

笑いたくなった。そう思うと心は死ぬ。

怒りたくなった。そう思うと愚かに思う。

すべてにおいて悪いのはこの雨だと決めたがるこの気持ちは、誰に向かわせればいいのだろうか？

そうどうしようもないいたちごっこの末、結果は出なかった。

バスから降りて、私はしょぼくれたバス停で、体操座りしていた。パンツとかそういうのが見えても関係ない。ただ小さくなってそこから消えなくなる。

私は足の間に顔を挟み、外の世界を見ないようにした。

おばあさんの銭湯から出てもう二日になる。さすがに股間の匂いとかも酷くなり始めていた。

言いたくないが、自慰とかもここ最近していない。

なんかそういう気分ではないのだ。

溜息を洩らすとその吐息はすぐに消えていった。

迎えに來ないかな……父さん。

情けない私の姿を見て倒産はどう思うのだろうか？　もしかすると頬を張り飛ばして私を家に連れて帰るかもしれない。そっちの方が一番樂だし、さらにうれしいかもしれない。

だってまだ私を必要としてくれているから。そう思うとそれでもいいかもしれないと思った。

「……痛いなあ」

ずり向けた足の皮は酷く、ずり向けていた。靴下が赤く染まり、疼痛が襲いかかる。

「……はあ」

溜息を洩らすのも疲れてきた。私はバス停の長椅子に寝転がり、ゆっくりと意識を飛ばした。

かちりと時計の秒針と長針短針がそろっような音が聞こえた。私は目を覚まし、ゆっくりと起き上がる。

堅い椅子のせいだろうか？ 首が痛かった。

朝の光が私を包み込み、気持ちを晴らしてくれていた。

しょぼくれたバス停が雨のおかげでキラキラと光っているように見える。

「……そういえば……」

ここに来た覚えがある。少しだけ前、あの少年と会った浜辺。あの少年はどこで何をしているのだろうかと思っただけだった。潮の匂いが鼻の中に入り、潮騒の音は耳に叩き込まれる。

こんなところに来てしまったのか？

私はゆっくりと堤防の階段へと向かった。

足の皮が捲れているから裸足で中に入るのにためらった。砂とかが中に入ったら落とすのに苦痛を伴うに違いない。

スニーカーで砂に入るとゆっくりと砂にめり込んだ。それと同時にきゅっとなる。

あ、そういえばここって音の鳴る浜辺って言われてたような。

そう思って私は歩きだす。

さくさくと足がめり込む度にきゅつきゅつと砂が鳴り響いた。
それが面白くてしばらく歩いていた。

しかしそれがどれだけ続いたかは知らない。

「あの」

「！」

私はスカートをあけて海に入ろうとしていた。裸足で、塩水が足に滲みる。

「あ、わわ！」

バランスを崩し、私は海の中へと落ちた。

パンツとかが濡れて気持ち悪い。海藻とかも服に入ってうねうねとしている。

敵意全開うなり声をあげてその方へと睨んだ。

言葉を失った。

「いや、あの久しぶり……ですよね？」

「……え？」

そこにいたのはあの時の少年だった。

第十七話…とある夢物語は海へと（後書き）

い、イグニッション！！！！！！！！

第十八話：家族ってなんだ

革ジャンのおじいさんに連れてこられた所には見覚えがあった。

病院から抜け出した初日、苦勞してやっと辿り着いた、あの家だ。

「ばあさん、帰ったでえ」

引き戸をガラガラと開け、中に入る。

革ジャンのせいにか、少しだけ背中が大きく見えた。

「おかえりなさい……まあ！」

「あ、どうも……」

中から顔をのぞかせたおばあさんが僕の顔を見て驚いた。

数日前に会ったばかりだが、なぜかとても懐かしく思えた。

「なんじゃあ？ 知り合いか？」

「ええ、そうですよ？」

「ほうか……」

玄関先で一人待たされる僕に氣遣ってか、背中を押されるように家の中に案内された。

すぐに晩御飯の準備がされ、僕の前にも美味しそうな食事が並んだ。

「遠慮せんで、どんどん食べるんよ」

おばあさんはそう言ってほうれん草のお浸しを出してくれた。

「いただきます」

これがおふくろの味なのだろうか。一口食べるだけで懐かしさがよみがえってきた。

僕の母親は料理が不得意で、ほとんどがレトルトだった。

おふくろの味は、他人の味だった。

おじいさんも色々と話しかけてくれた。

これが家族団らんというものか。

共働きの両親とはだんらんの時間なんてなかった。

だから寂しいというのはあったけれども、当たり前なのだと思う

ていた。

僕はその後床につかせてもらって、久しぶりにまともな半日を過ごせる事ができた。

それもこれもすべてこの家のおじいさん、おばあさんのおかげだ。何か、僕が生きている間に何かを残したいと思った。枕に頭を乗せ、布団を首まで引き寄せながら考えた。

高齢者の朝は早いというが、ここまで早いものだとは思わなかった。

大きな柱時計は六時半を指している。

僕は眠りが浅いのだが、おばあさんはそんな僕よりも早く起きて洗濯物を干している。

「あ、おはようさん」

「おはようございます……」

眠い目をこすり、蒲団をたたむ。

もうこの家族の一員になったような気分だった。家族のありがたさを初めて知ったのだ。

「おはよう」

革ジャンのおじいさんはさすがに寝巻姿だ。

だがもう朝飯はとくに平らげたらしく、台所には僕のぶんだけが置かれてあった。

「作った時に起こそうかと思ったんじゃけど、気持ち良さそうに寝とったけえおこさなんだよ。ごめんね」

おばあさんがそう言ってくれた。

いつもの僕なら「なんで冷たいもん食わせるんだ」と言ってしまうだろうが、そんな感情は微塵も感じなかった。

むしろ感謝だ。

細かい気づかいに申し訳なささがこみあげてくる。

「いえいえ、食べさせてもらえるだけで幸せです」

一口食べると、頭が回転した。

今日はまた彼女探しをはじめよう。

さあ、どこにしようか……。

「今日はどこにいくんね？」

洗濯物を干し終わって台所にやってくるおばあさん。

「どこにしましょうか……。人が集まりそうなところ、ありますか？」

「海とかどうかのう？ 近いし」

「ばあさん、海はまだ早いじゃろ」

二人でみつめあつて笑っている。

幸せそうな老夫婦だ。

「海かあ……」

海と言えば彼女だ。

あの日がまた頭の中でフラッシュバックしてきた。

もしかしたらいるかもしれない。

可能性はゼロではないだろう。

とりあえず行ってみる価値はありそうだ。

僕はそう告げると、また多めにお小遣いをもらった。

さすがに二度目は遠慮しておいたのだが、どうしてもという言葉に根負けした。

何もかも老夫婦のためになれなかったのが後悔すべき点だが、またいつか『親孝行』をしに戻ってくると約束し、海に向かった。

海は昨日の雨の影響か、少々荒れているようにも思えた。

そしてきつと冷たいだろう。

岸壁から見る海にはほとんどだれもいなかった。

ただ、見覚えのある人影が一人。

あれはもしかして……。

見た感じは女性だ。砂浜でうろろしている。

多分違うとは思うが、可能性はゼロではない。

僕はゆっくり近づき、後から声をかけた。

「あのっ」

「えっ、あっ、わわっ！」

その女性はこちらを見ながら海の方へと倒れていった。その顔は驚きばかりの表情だが、確かな事が分かった。彼女だ。

紛れもなく、探していた彼女だった。

綺麗な顔立ちで僕を睨んでくる。

かと思えば表情を一変し、さっきとは違う驚きの表情を見せた。僕ははやる気持ちを抑えきれず、単刀直入に聞いた。

「いや、あの久しぶり……ですよね？」

第十八話：家族ってなんだ（後書き）

イグニッションって……何???

第十九話：私の名前

空はだんだん紅くなり始め、太陽は地平線へと落ちてゆく時間になる。それはどれ位といえば二十四割る二くらい。

いわゆる半日も浜辺にいた。

私は隣にいる少年と座っていて、ぼんやりとその落ちてゆく太陽を見ていた。少しだけちらりと見ると少年はよれよれの服を着ていてみずばらしい。女性の性を刺激するような服装だった。

「汚いね」

「だね。まさかこんなにボロボロになるとは思ってもなかったよ」

「服はなかったの？」

「まあね」

汚いね。と私は言った。もちろん彼はそうかなといって自分の今着ているものを見ている。さくりと靴の踵を砂に埋めた。

「そういえば君ホスピスは？」

「抜け出したと言えはいいのかな？ 君と別れてすぐに旅に出たんだよ」

「自分探しの？」

「うん。たぶん」

「どうしてそんなに曖昧なんさ」

うーん。そんなこと言われても名あと彼は逡巡している。
イライラしてきた。

「まあ、色々あったんだよね」

「ふうん」

そこで会話が途切れた。

私はゆっくりと立ち上がり、砂浜の砂をじっと見つめていた。
私は一粒の砂なんだ。ほかは何億という人。

「私ってさ小さい人間だったんだよね」

「え？」

振り返り、彼と向かい合うように座る。体操座りだからパンツは見えているだろう。彼は眼を逸らし、話を促した。

「いつも人ばかりしか男に付きまとは振られてね。何してるのか分からないくらいにしていたら、ある人が私に近づいてきたんだよ」

「そうなんですか」

「うん。それが確か高校二年の秋ぐらい」

「近いね時期が」

確かに、その時は多分四か月前だ。

「その人は私より先輩で、私を見てくれたの。たくさんデートしてもらったし、たくさん私の体を抱きしめてくれたりもした」

「……」

彼は嫌そうな顔をしてきた。

そうだこれは私のトラウマの話だからね。いやな顔をするにきまつているじゃない。

それなのにそれを話したがる私は何だろうか？ 彼を試しているのかそれとも違うのか。それは私にはよくわからなかった。

「だけどある時私を求めるものが違ってきたんだ。お金を貢いだり、体を貪られたりして、しかもビデオまで撮られることだってあった。私は付き合うからいつの間にか【お遊び】になっていたんだ」

彼は黙った。完全に私の言葉から離れている。

「それはそうよね、君は病院というシエルターに阻まれてそんなことは何もなかったんだから」

少しだけ私は深呼吸をした。

「その後私は警察に行つて、彼を捕まえてもらったわ。その人はその高校から緊急退学。追放ね」

「君は…その後は？」

「もちろん人を好きになるというのには恐怖をもったわ。だけどね、昔から私はいろんな人に恋したいと思ったのよ。いつかは私をちゃんと見てくれる人がいるんだって思っていたから、信じていたから」

彼は私を見つめた。私は彼の手に少しだけ触れようとしたがそれはやめることにした。

「君は多分私を追いかけていたと思うけど。その私は汚れているの」

それでも私を求めてくれるの？ と最後の言葉は言わなかった。彼はそれを読み取って私を助けてくれるのか……。それとも彼はそのまま私を捨てるのか。

彼は紙を取り出した。

「これ、君のでしょ？」

「……？」

手にしたのはルーズリーフだった。くしゃくしゃに丸められていて、ごみみたいなものだがそれには見覚えがあった。

「あ……」

「これをここで見つけて、僕は君を探していたんだ。いまどきボトルレターとか摩訶不思議だったから取ったんだけどね……」

彼は立つ。下から見ているからなんだが、意外と体格が大きいように見えた。

「
」

それは潮騒に声が飲み込まれ、私の耳には届かないだろう。

しかし心には響くほどの大きさだ。

「分かった？」

彼はゆっくりと手を出す。その手は私に立つように催促していた。

「……まあ、ちょっとだけ」

私は微笑み、その彼の手を握る。

「あ、君の名前を忘れてた。君の名前は？」

「後何日しか残ってない人に言わなきゃいけないのかな？」

「うーん。実は嘘だったといえはどうなる？」

「言うわ」

嘘じゃないんだけどねと彼は笑った。

太陽は半分地平線に飲み込まれていた。まるで君と初めて会った時間帯だ。

「私の名前は……」

第十九話：私の名前（後書き）

がんばって！　あと少しだよ！

第二十話：嘘なんかじゃないけどね。

「汚いね」

彼女の声だ。

あんなに待ち焦がれた、彼女の声だ。

いつもなら傷つくようなひと言も、今回は違った。
嬉しいを通り越している。

「だね。まさかこんなにボロボロになるとは思ってもなかったよ」

「服はなかったの？」

「まあね」

軽快な会話がひとつひとつ優しく心をくすぐる。

僕は恥ずかしくなって目をそむけた。

「そういえば君ホスピスは？」

「抜け出したと言えはいいのかな？ 君と別れてすぐに旅に出たんだよ」

「自分探しの？」

「うん。たぶん」

「どうしてそんなに曖昧なんさ」

最後の一言に僕は言葉を失った。

どうして曖昧なのだろう。

自分のことなのによく分からなかった。

言葉を必死に探すか、みつからない。

「まあ、色々あったんだよね」

「ふっん」

明らかにいらだっている彼女を横目に、砂をけった。

嫌な汗をかいていた。

「私ってさ小さい人間だったんだよね」

「え？」

突然の言葉に反応しきれず、僕は間拔けな顔で佇んだ。

海を見ていた彼女は僕の方へ振り返り、その場で体操座りをした。これが何を意味するのか僕には理解できず、思わず目をそらした。「いっつも人ばかりしかも男に付きまとは振られてね。何してるのか分からないくらいにしていたら、ある人が私に近づいてきたんだよ」

「そうなんですか」

「うん。それが確か高校二年の秋ぐらい」

「近いね時期が」

「その人は私より先輩で、私を見てくれたの。たくさんデートしてもらったし、たくさん私の体を抱きしめてくれたりもした」

「そうだったのか……とどんな表情でいたらいいか迷う」

僕の表情は無意識のうちに険しくなっていると思う。

彼女はそんな僕を見てどう思うだろうか。

きつと嫌われているのだろう。

尚も話は続いた。

「だけどある時私を求めるものが違ってきたんだ。お金を貢いだり、体を貪られたりして、しかもビデオまで撮られることだってあった。私は付き合うからいつの間にか【お遊び】になっていたんだ」

返す言葉が見つからない。

彼女は想像以上に苦しみぬいて生きていたんだ。

僕のように変化が体に現れない分、ダメージは大きいだろう。

ますます言葉をかけづらい。

「それはそうよね、君は病院というシエルターに阻まれてそんなことは何もなかったんだから」

深呼吸する彼女はどこか力感が無い。

「その後私は警察に行つて、彼を捕まえてもらったわ。その人はその高校から緊急退学。追放ね」

「君は……その後は？」

「もちろん人を好きになるというのには恐怖をもったわ。だけどね、昔から私はいろんな人に恋したいと思ったのよ。いつかは私をちゃ

んと見てくれる人がいるんだって思っていたから、信じていたから」

僕は無意識のうちに彼女をみつめていた。

彼女を抱きしめたいと思った。

彼女を、温めたいと思った。

「君は多分私を追いかけていたと思うけど。その私は汚れているの」

そんな事は無い。

僕にとつての彼女は希望だ。

生きるためのエネルギーだ。

下を向いて悲しげな表情をする彼女。

そんな彼女に、僕はいつかのあの手紙を見せた。

「これ、君のでしょ？」

「……？」

そのしわくちな紙をじつと見つめる彼女。

大切にしていたが、汗や雨がにじんでいる。

「あ……」

「これをここで見つけて、僕は君を探していたんだ。いまどきボトルレターとか摩訶不思議だったから取っただけだね……」

僕は海を見ながら立ちあがった。

思ったよりも体が重たい。

「分かった？」

彼女に向かって手を差し伸べた。

なんとなくだが彼女の表情には色が付いていた。

「……まあ、ちょっとだけ」

「あ、君の名前を忘れてた。君の名前は？」

「後何日しか残ってない人に言わなきゃいけないのかな？」

そうかもしれない。

でも僕は、彼女の名前を聞いてからではないと満足してむこうの世界へいけないような気がした。

「うーん。実は嘘だったといえどどうなる？」

「言っわ。私の名前は……」

彼女の背後から夕焼けが顔をのぞかせた。

第二十話：嘘なんかじゃないけどね。（後書き）

さあ、次は最終話ですね！

最後は斉藤さん、決めちゃってください！

第二十三話：会いに行こう、果てしない世界にいる君の元まで

夏の日差しは私を遠慮なく私に襲い掛かってきていた。

道路にあたると水蒸気が悶々と立ちこもり、陽炎を引き起こしている。

まさに灼熱地獄とはこのことを言うのかと思うと、気が引けてしまった。

「だつつい」

だるいと暑いを掛け合わせたこの言葉はいつかは世界流行語大賞になるだろうと思っていた。

しかし、こんな一般人が行ってもそんなに広まる事はないだろうと思っている。だって一般人だし。

芸能人が行ってくれたらいいのにと思ったりもした。

「おい、置いてくぞー」

「うるさい！ 寿命きれてんなら早く行っちゃまえ！」

私から、数メートル離れたところにあの彼がいた。

海で出会ってから、もう三ヶ月は経つのだろうか？　ぴんぴん過ぎるくらい元気な病人である事。

「あれ、嘘だったんじゃないの？」

「何が？」

私は彼に追いついた時に呟いた。

もちろん彼は何の事かさっぱりピーマンのはずだ。ピーマンをつけたのはなんとなくでしかこの言葉はもう死語のはずだ。

「うん。なんでもない」

「そっか」

劣化したプラスチックのベンチに座れと促す彼に私は礼をしてゆつくりと腰をおろした。

「もう夏だね」

「梅雨の時期はもうどこにやらだね」

そんな暢気な事を言っていられるのは、彼のおかげだろうか？
超マイペースな彼がいるおかげで私の心もマイペースになっている。
る。

いわゆる感染だ。

「じわじわと蝉が啼いていて、喧しいけど逆にこれも清々しいと言っか……」

「それ松尾芭蕉の歌に無かった？」

「あつたね。たしか、岩に染み入る蝉の声だっけ？」

「うん。それ」

私は隣があいていることに気づき、彼の服を引っ張った。

彼はそれに順じ、椅子に座る。

彼の体温が離れていても分かる。まだ生きている。まだ動いていると証明できる体温は夏のせいで酷く暑苦しいものだった。

「ねえ？」

「なに？」

そよそよと生暖かい風がなびく。

「私たちはいつまで一緒にいられるのかな？」

「んー、少なくとも僕は君と結婚するときまで生きていたいね」

「うわ、結婚前提に付き合ってるのか私たち」

「じゃあ、両親に言わなきゃいけないかな？」

私はぴたりとブリキの発条が切れた人形のように止まった。

「本気なの？」

「本気じゃあ無かったら君とここまで一緒にいないさ」

私はぴたりと止まったまま、彼を見ていた。

うわ、なんかとても男前……。

真直ぐ見つめ返してくる彼の目がとてもきれいだった。

「僕はよければ君と最期までいたいけど……君は？」

「うーん……」

少し逡巡しているとバスがやってきた。私は話をはぐらかす様に立ち、バス停乗り口に立った。

彼も私の後ろに付いて乗り込む。

バスの中はきんきんに冷房が効いていて、肌寒い。しかし、これくらいが一番良いのかもしれない。

「私も、君と最期までいても良いよ。よければ私が死ぬまで一緒

にいてほしいかも」

「……それはちよつと無理かもしれないね」

「えー、がんばってよー。せめて子供まで」

「え！？ どこまで続いてるの計画！」

「せめて五人はほしいよねえ」

「ちよつと待って！ 生きているのがやつとなのに子作りまで頑張らなきゃいけないの！？ 腹上死しちゃうよ！」

私たちは笑いあう。彼は少しだけ慌てているけどそれは気にしない。

私はどこまでも旅をする。

君の元まで、どこまでも……

君の元が私のゴール。

第二十三話：会いに行こう、果てしない世界にいる君の元まで（後書き）

終わった？ 終わったの！？

竜さんお疲れまでした！ いろいろと迷惑をかけましたけどこれからもまたよろしくお願いします！

ちなみにサークルとか何とかって言ってましたけど何かしてるんですか？

まあ、気にすることありませんかw
また会えることを祈って。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4767k/>

会いに行こう、果てしない世界にいる君の元まで

2010年10月13日13時47分発行